
異界の狩人

LLL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の狩人

【Nコード】

N6150W

【作者名】

LLLL

【あらすじ】

高校二年生の少年、旭彰は帰宅途中に不思議な骨董品店に立ち寄った。そこで見つけた光り輝く玉。それに触れた彰は光に包まれ、そして消えてしまう。彰は異世界に漂流してしまう。狩るか狩られるかの世界で彰は一体どうなるのか。という風な物語です。 MonsterHunterの二次創作です。不定期更新の予定。処女作ですが、どうかよろしくお願いします。

ブローグ 突然の幕開けに、あまりにも無防備

自宅から近いという理由で受けた私立高校の正門を抜ける。外気に触れた瞬間、立ち込める熱気に辟易する。

門のすぐ前の道路は大通りに通じる道で、自動車が渋滞している。学校から出て左に歩き始める、歩道に出るとさらに暑い。強く照りつける陽光が街路樹の葉の間を押しつけるように射してくる。

校内のグラウンドが見える。

スポーツで有名な学校ではないが、部員と思しき集団は声を上げながらランニングをしている。

自分は部活動に所属していない。

理由はただ単に面倒だから。

運動が苦手なわけではないが、この暑い中自ら汗を流すようなことはしたくない。

2

今日は予定がない。

それはいつもどおりであって、友人がいるにはいるが、比較的ドライな関係だ。

就職活動も始まったばかりで、放課後以降に校内に居る理由が無い。最も、いまだに進学するか就職するかも決めていないが……。

日差しは相変わらずに強い。

頭に熱が集まっている感覚がする。

日本人の髪はなぜ黒いのだろうか。

日が強いと日光を吸収して良くないのではないか。
進化する際に気づいてもよさそうなものだ。

しかし考えてもいきなり変色するわけではないので、考えるのをやめる。

暑い……。

だまって歩き続けるこの少年の名前は旭彰^{あしたけい}。
現在高校三年生で、ごく平凡な家庭に育った。

趣味も特技も特徴もない。

彰自身はそのことを数年前まで嫌がっていたが、最近はまるっきりにしないようになった。

きつと大人になったんだろう、と勝手に考えている。

帰路につく途中、母親に頼まれていた買い物をするためスーパーに向かう。

いつもは通らない道を通り、近道をする。

見たことの無い景色が新鮮で、きよろきよろと珍しそうに見ている。

すると、民家に紛れるように目立たない骨董品店のような店が目に入った。

意図して目立たせていないと思うほど気づきにくい。

老人が趣味で経営しているような感じだ。

好奇心に従い店内へ入ってみる。

中は涼しく、外の暑さが嘘のようだ。

周りを大きく見渡すと、扇風機が一台稼動しているだけだ。

それ以外はまるで時間が止まったように動きが無い、そんな空間だ。

探してみても店員らしき人物は見当たらない。

人間の気配がない。

しかし何かを買うつもりではないし、少し見たら出て行く気だ。呼ぶ必要は無い。

店内を周りながら品物を見てみると、ひとつだけ明らかに異彩を放っている物があった。

宝玉、ともいうべき輝き。

覗いてみると向こうが見えるほど透明でほぼ無色。目が奪われる、というのは初めての経験だ。

それは一点の曇りも無く輝いていて、美しい球形だ。

今度は触れてみようとする。

なんとなく触りたくなった。

べたべたと触ることさえ躊躇う。

そつと持ち上げて凝視してみる。

球体には細かな傷さえ無く、まるで今生まれたばかりのような美しさだ。

少しの間触っていると、突然光が溢れた。

彰の体、そして店の中を包むように光りだした。

彰は声を出そうとしたが出ない。

音が響かない、というより響きが発生しない。

そして次に体が動かない。

動かないのに体はリラックスしている。

全身が弛緩している感覚、心地よい。

だが、次の瞬間。

突然周りが回転しだした。

どこかに引つ張られる。

まるでへその奥から引つ張られるようだ。

周りの景色が歪む。

いや、歪んでいるのは俺の視界だ。

どうなるのだろう、これから。

しかし、考えている最中に思考が分断される。

光は一瞬大きくなってから、段々と収束し始める。

幻想的な光景の中、彰は不思議と落ち着いていた。

きつと大丈夫、なんとかなる。

この光は、そう思わせてくれる優しさに満ちている。

そして光とともに彰は消えた。

……光が発生してから約三十秒後、旭彰は世界を飛んだ。

第一話 別世界への飛翔、そして出会い

「く……、頭が……」

彰は目を覚ますと激しい頭痛を感じた。

そして次に船酔いのように脳がゆれている感覚に陥った。

「ここは、どこだ……?」

辺りを見回す。

そして、自分が覚醒しているかを疑った。

「凄い……、見渡す限りに森が……」

ひよっとしたら夢かもしれない、と彰は思った。

だが、夢にしては意識がはっきりしている。

さらに眼下に広がる広大な樹海。

大きなエネルギーのようなものを感じる。

「夢じゃない、現実だ……!」

冷たい風の中で彰は興奮していた。

壮大な風景に、明らかに日本とは違う光景に。

きつと軽い酩酊状態にいるのかもしれない。

まだ光の中に居た時の気持ち良さの余韻が残っている。

「はあ……」ため息をついた。

未来への不安と期待に。

「どつするか、これから……」

ふと、巨視的に風景を見渡してみる。
すると、正面に森を抜けたところに雪山が見える。
そしてその中腹で、煙が上がっている。
目を凝らすと集落のようなものが見える気がする。
なんとなくだが。

「でも、あそこまで行けるか……？」

ざっと見ても十五キロメートルはある。
雪は降っていないが、息が薄く白い。
学校の夏服では寒いだろう。

「つつても、他には見あたらないしなあ」

行くしかない、そう思ったその時。

「ん、あれは？」

崖の下に何かが見える。

「……人間？」

よく見ると人の形が見えた気がした。
なにやら倒れているようにも思える。

「おーい、大丈夫か！」

遠くからじゃ動いてるかも分からない。

集落に向かうためにはどのみち下に行かなければならない。

「しかたない、下ろす」

さて、どうやって下ろすか……。

第一話 別世界への飛翔、そして出会い

「よっ、と」

近づくにつれて、謎の人物が見えてきた。

長い桃色の髪、見たこともない格好。

背負っている刀、実に刃渡り八十センチメートルはありそうだ。

「どんな格好してるんだ、こいつ……」

明らかに一般人ではない。

「はっ、と……」

ふう、やっと着いたぜ」

倒れている人間をしてみる。

顔を見ると女性のようだ、顔立ちも整っている。
長いまつげに琥珀色の瞳、シュツと通った鼻筋。
美しいと表現できる。

しかしそんな場合ではない。

急いで脈をとる。

どうやら死んではない様だ。

だが太腿から血を流している、息も絶え絶えだ。

「おい、大丈夫か！返事をしろ！」

「ぐ……、誰……？」

「怪我してるのは脚だけか！？」

「え、ええ……。痛っ……。！」

「よし……！」

彰はスラックスのポケットからハンカチを取り出す。

「これで、血は止まるはず……」

処置をしてすぐ、女性は上半身をゆっくりと起こした。どうやら血が足りないらしく、頭をおさえている。

「ぐっ……、すみません。」

迷惑をかけてしまって……」

「気にしないでいい、見捨てることも出来ないだろ。」

……ところで、あっちの雪山には村とかあるのか？
もしそうなら行きたいんだけど……」

「はい……、ポツケ村っていう集落があるんです。」

私は今そこに滞在してます」

やはり村はあったようだ。

「へえ……、あなたのその格好は？」

いや、その前に自己紹介だな。

俺の名前は……、アキラ、アサヒ。
よろしく頼む」

「アキラアサヒ……さん？」

その、珍しい名前ですね。

ここへは遠くから？」

「ああ、まあ。」

結構遠くから来たかな。

……あなたの名前は？」

「あ、私の名前はクラリス・フィーンです。助かりました、アサヒさん」

「アキラでいいよ、敬語もいい。よろしく、フィーン」

思ったとおりここらは日本ではないようだ。

「えっと……、じゃあアキラ、よろしくね。」

私もクラリスでいいわ、助けてもらったんだし」

「ああ、よろしく。」

……まず聞きたいんだけど、その格好は……？」

「ああ、これ？」

私、ハンターやってるの。

まだ初心者だけどね」

「ハンター……？」

狩りをしてるのか？

一体何を狩る気だ、そんな装備で……。

「ええ……依頼を受けてモンスターを狩ったり、危険な場所に行つて物を採ってきたりとか。

色々あるわね。」

アキラの故郷にはなかったのかしら」

「い、いや。」

そういえばあったな、うん。」

ハンター……、ハンターな」

「そう?」

確信した、ここは地球じゃない。
違う世界なんだ。

まずモンスターって単語がおかしい。
多少ニュアンスが違う気がする。

というかそもそも日本語が通じてるのか……?
おかしくないか、なんか。

「なあクラリス、この国って何語が公用語だっけ?」言葉を選びながら尋ねる。

「え?いやね、王国言語に決まってるじゃない。
アキラも今使ってるでしょう」

「あ、ああ。」

「いや、そうだった」

初めて聞く言語だ。

俺は日本語を話してるつもりなのに。
しゃべる言葉が勝手に翻訳されているのか?
理由は分からないが、あの謎の光が原因かもな。

「でも、ごめんなさい」

急に謝罪の言葉を発するクラリス。

「え、何が？」

彰は謝られる理由が分からない。

「出来れば村まで案内したいんだけど、まだ動けないわ。

森の中は危険だし……」

負傷した脚が目についた。

どう見ても歩けそうにない。

「だから、申し訳ないんだけど一人で……」

「いや」

「え……？」

彰はクラリスの手をとった。

「俺が連れて行くよ」

「……むりよ、装備が重いし……」。

森の中は今本当に危ないの、とてもじゃないけど……」

「装備は置いていけばいい。

それに危険ならなおさら案内が必要だ」

彰の言葉に、クラリスは呆然としている。

「……でも、きつと重いし……」

「森の中が危険ならここだって安全じゃないだろ。休みながら行けば大丈夫」

「迷惑じゃ……」

「迷惑なんかじゃないよ。」

ここに置いておくことはできないだろ、名前まで知ったのにさ」

ここでクラリスを見捨てるという選択肢は、俺には無かった。

案内が無ければまっすぐ進むことはできないし、この世界の知識が乏しい俺ではどうなるか分からない。

俺がクラリスを連れて行くのが、一番良いだろう。

だがクラリスは、彰の提案が予想外であるらしかった。

「どうして……？」

クラリスは俯いて、今にも泣きそうだ。

「そんなことをしても、あなたに得なんてないわ……。」

案内できるほど私は地理に詳しくないの……」

「いないよりマシさ」

「そんなはずない！」

クラリスは俯きながら叫ぶ。

「わかってるでしょう、あなたも！」

「わからないな」

「どうして……！」

「なんでお前が助けを求めないのか、分からない」

「助け……？」

クラリスは弱々しい声で疑問をぶつける。

「そんな不安そうな顔して……、自分がこのままここに留まったら死ぬことはわかってるんだろう？」

「……………」

クラリスは顔を伏せたまま黙っている。

「本当は死にたくないはずだ。

普通は誰でもそう思う」

「……私が死んでも悲しむ人なんていない……」

「親は……？」 彰が尋ねる。

「死んだわ……、モンスターに襲われて……」

「親だけじゃない、その後養ってくれた親戚も……。その後も何度もね……。」

「誰も、ということはないだろ」

「私はみんなに嫌われてるのよ……。
何度もモンスターに襲われて私だけ生き残ったの……。
結構有名なんだけどな……、小さな村の疫病神って。
……そのせいでこの辺境まで来ないと暮らしていけなかった」

クラリスは語り続ける。

「ハンターくらいしかできなかったわ……。

保護者も保証人もいらない仕事なんて、これくらいよ……。」

「……それで？」

「だから、私を連れて行ったらあなたも……。」

「お前、本当に信じてるのか？

自分が疫病神だって」

「信じるしか……、ないもの……。」

虚ろな目だ。

本当に自分が疫病神だって信じている。

「でも、俺は信じない」

「嘘よ……。」クラリスはすでに泣いている。

「クラリス……。」

彰はクラリスの頭に手を置いた。

「アキ……ラ……」

最初はびくついていたが、徐々に安心していく。

「俺はお前を嫌ったりしないよ、クラリス……」。

会って間もないけど、お前が俺を心配してくれているのは分かる。
それに……」

彰はクラリスの目を見つめる。

「こんな綺麗な瞳をしたやつを……、疫病神なんかにしてたまるか
……」

これは俺の心からの気持ちだ。

周りに蔑まれながらも、こいつは穢れずに生きてきたんだ。
そんなやつをこんな場所で死なせたたくない。

「クラリス、俺を信じてくれ……」

俺は、お前を信じる。

「アキラ……、アキラ……！」

クラリスは目を泣き腫らす。

そして涙とともに感情が溢れ出した。

「本音でぶつかってくれ、クラリス。

まず一歩、踏み込まなくちゃいけないだろ……」

クラリスに語りかける。
少しずつ、顔を上げる。

「私、もうだめだって思ってたから……」
少しずつ、吐き出していく。

「ここで死ぬんだな……、思ってたから。
アキラが助けてくれたときも、すぐくほっとした」

「ああ……」

「でも、自分なんかって……、諦めてて……。
ごめんなさい。本当に、ごめんなさい……」

「クラリス……」

「そして、ありがとう……！」

……俺はこの世界のことは何一つ知らない。
しかも、未知の体験に少なからず浮かれていた。
だから、大切なことを見失っていたのかもしれない。

一番不安なのはクラリスだったんだ。
この世界の危険性を知っているならよくない想像だっ
てしてしまう
だろう。

何にやられたのかは分からないが、傷も浅くない。
自分が助かる望みも薄かったはずだ。

俺がこの場所に現れたこと自体、たぶん偶然だろう。

クラリスが助かる保証はどこにも無かった。
倒れた経緯は知らなくとも、どれだけ恐怖していたかは想像できる。

今はこいつを守ってやりたい。

クラリスに自分の価値を教えてやりたい。

「もう大丈夫だ、クラリス。

ほら、背中に乗れよ」

保証はない。

でも、クラリスを安心させるためだ。

それはこいつもわかっているだろう。

「うん……、うん……！」

それでもいい。

前に進めるなら、それでも……

異世界は初っ端から大変なことになった。

この現状から、充分にこれから波乱がまっているであろうことが予測できる。

まずは、ポツケ村だ。

ひとつ、息を吐いた。

少しだけ不安が消えた気がする。

白い息は、雲ひとつ無い青空に、淡く霞んでいった。

第二話 負傷の原因、そして不安（前書き）

彰は携帯をちょうど持っていないときにこの世界に来た、という裏設定。

第二話 負傷の原因、そして不安

「ふう、ここらで一休みするか」

「そうね、フラヒヤ山脈までは、まだ結構あるし」

二人は森の中を進んでいた。

彰は運動不足がたたってかなり疲れていたが、クラリスの道案内で気持ちが悪くなった。

未来への不安が多少なりとも消えたことが、彰を精神的に奮い立たせていた。

フラヒヤ山脈というのは彰たちの眼前にそびえる山脈一帯の総称である。

彰たちは現在そこを目指して歩いている、といってもクラリスは彰におぶさられているが。

「それにしても」

「何、アキラ？」

「その刀……、それでモンスターを倒すのか？」

彰はクラリスが背負っている刀を指差す。

「ええ、そうね。」

名前は骨刀【狼牙】っていうの」

「へえ、凄いな……」

「これより、その道具の方が凄いわよ！」

「ああ、これな」

彰はライターを手に取り、クラリスに渡す。

「名前はライター……、だっけ？」

「凄いわね、ここを押すだけで火が出るなんて……」

「どこで手に入れたの？」

「いや、まあ……、たまたま売ってさ。」

「珍しいから買ったんだ」

元の世界にあったもので、俺は違う世界から来ました。なんて本当のことを言うわけにもいかず、適当にごまかす。

「へえ……、行商人かしら」

「ま、まあいいじゃないか、そのことは！」

「……それより、クラリスはどうして怪我したんだ？」

「まさかそこらで転んでできる傷じゃないよな、それ」

彰はクラリスの腕を指差す。

その箇所にはハンカチが巻いてあって、赤黒い血液がじわりと滲んでいた。

「この傷は、ギアノスにやられたの……」

「ギアノス？」繰り返す彰。

「ええ、小型のモンスター」

新しく聞いた単語に、彰は眉を顰めた。

「ギアノスは、主に積雪地帯に繁殖しているわ。肉食で獰猛、かなり攻撃的な性格なの。私はギアノスの鋭い爪に引っ搔かれて、こうなった」

「でも、クラリスはハンターなんだから？
そんなに強いのか、そいつは？」

「いえ、一匹一匹の強さはそれほどでもないわ。私は何度も倒している」

「じゃあなんで……」

クラリスは息を小さく吸い込んだ。

「……ドスギアノスよ」

「ドス、ギアノス……？」やはり聞き返す彰。

「ギアノスたちのリーダーで、ギアノスを上回る獰猛性。加えて子分たちより一回り大きい図体……。はつきり言つて、今の私じゃ倒せないわ……」

クラリスは、少し顔を俯かせる。

「なるほど……」頷く彰。

「さらに群れで来られて、このザマよ……」

大体の情報は把握できた。

ギアノスは群れを作る習性で、人を襲う。

さらにドスギアノス、こいつは厄介だ。

雪山に近づくほど、危険度は増すだろう。

なぜ森の中へ来ているかは知らないが、どちらにしろ問題だな。

「注意して進まない。ばったり会うこともあるわけか……」

「まあ、そうね。」

今の時期は動物はみんな冬眠してるから、エサを探して走り回ってるかも」

山まではまだ遠い、襲われたら対処はむずかしいぞ。

慎重に、それでいて迅速に進むしかないな。

「よし、あと少し休んだら行くか」彰は立ち上がった。

今はまだ、危険の兆候は見られない。

なら距離をできるだけ稼いでおきたい、それが彰の今の心境だった。

「よい……、しよっと……。歩けるかクラリス？」手を掴んでクラリスを起き上がらせる彰。

「ううん……、まだ無理みたい。ごめんね？」

「いや、いいけどよ……」

なんか、泣いてから急に遠慮しなくなったな、こいつ。
それどころか甘えるような声だ。

「じゃあ、よろしくね?」

おんぶして、という意味の言葉。

「お、おう……」少し狼狽する彰。

クラリスの前でしゃがみ、背中に乗せる。

クラリスは体重を預けてしがみつく。

心なしか、抱きつく力が強い。

「よし、じゃあ……、行くか」

「うん」弾んだ声を出すクラリス。

「はあ……」

彰は小さくため息をついた。

「や、やっぱり……、私重いかしら……?」

そのため息が聞こえたようで、クラリスはためらいがちに聞いてくる。

「……?いや、重くねえよ。」

「なんでいきなり?」

「その、ちょっと気になって……」顔を赤らめるクラリス。
多少なりとも、恥ずかしいのだろうか。
きつと今まで背負われたことなどないのだろうか。

「大丈夫、軽いもんだ」

「そ、そう？ならいいけど……」

彰は不思議だったが、クラリスが女性だということを鑑みて重いと
は言わなかった。

本当は重いけどな……。

実はクラリスは装備以外にも、様々な狩りの道具なども持っていた。
傷を癒す回復薬、刀を研ぐ砥石、さらにはこの森で採取したキノコ
などだ。

彰はそれくらい問題ないと言って道具を捨てずに持ってクラリスを
運んでいた。

始めは意気揚々と進んでいたが、少し歩いた辺りからそのことを後
悔していた。

だからといって今更、捨てていこうとは言えない。

し、死ぬ……。

前途多難な道程だ。

荷重制限をオーバーしている荷物に、強くしがみついて頭に顔を押し
付けてくるクラリス。

心配事の絶えない、彰であった。

第三話 予想外の出来事、そして逃走

「結局、ここまで来ちまったな……」

彰が咳く。

その言葉に返ってきたのは、彰の背中に眠るクラリスの寝息だけだった。

「何も危険なんて無かったぞ、寒い以外は」

何度か夜を越して歩を進めてきたが、一番二人が辛かったのは厳しい寒さだった。

木の上で過ごしたり、その葉を体にかぶせて寝たりと、工夫しながらやっとの思いで生きてきたのだ。

そうして、過ごした数日間の中で彰が最も感じたことはひとつ。

辛い、ただそれだけだった。

元の世界での苦の無い暮らしから、いきなりサバイバル生活という急激な環境の変化が思いのほか辛かった。

もちろん、クラリスにはそういう素振りを見せぬようにしていた。

不安を少しでも減らそうと思っっているからだ。

ついていけないと思うほどではない。

問題なのはこれからだ。

「さすがに寒すぎる……、氷点下だとなあ……」

フラヒヤ山脈、その麓に二人はいた。

すでに足元には雪が積もっている。
今はまだ大丈夫だが、ポツケ村まで辿り着く前に凍えて死ぬかもしれない。

「どうするかな……」誰に向けるでもなく呟く。

「うう……、ん……。」

アキラ……?」

クラリスが目を覚ました、寒さによってだろつ。
小さく周りを見てから、目の前の雪山に気付く。

「あ……、私、寝てた……?」

「ああ」彰が頷く。

クラリスは一瞬目を伏せて彰の方を見た。
しかし、彰の背中に乗っているのでクラリスの動きは一切彰には見えない。
だがクラリスは忙しなく視線を動かしている。

「そ、その……、ごめんなさい。」

……あと、もしかして寝顔見たりとか……」

「まあ、背負うときちらつとは見えただけ……」

「うう、恥ずかしいかも……」

「いや、別に普通だったけどな」彰が首を少し後ろに向けて言う。

「ふ、普通……?」

「ああ」

クラリスが頭をがっくりと下げて落ち込む。

だがやはり彰には見えないので首をかしげるだけである。

「ところで……」

「……なあに?」クラリスが気の抜けた声で聞き返す。

「……こっから、ポツケ村には行けるのか?」

「あ、うん。行けるよ、寒いけど」事も無げに答える。

「……死なない?」

「まあ、春だしね。死ぬほどではないわ」

どうやら、このままでも問題ないらしい。

それを知った彰は、早速歩き出す。

「あ、もう行くの?」

クラリスが聞いてくる。

「日が落ちないうちにさ、着いた方がいいだろ?」

……それに俺は十分くらいここに立ってたからな……、誰かさんとは違って」

「うっ、ごめん……」

「まったく……、そんなに俺の背中が好きなのか？」

彰がクラリスを冗談を言う。

最近はクラリスの扱いにも慣れてきたらしく、たまにこうしてからかうようだ。

「え！その……、うん……」顔を赤くするクラリス。

だがクラリスは本気にしたらしく真面目に答える。

「そうなの……。あつたかくて安心できるのかな……」

予想外に本気の言葉が返ってきて彰は驚く。

相変わらず顔が見えないので様子は分からない。

だが考えているよりクラリスは甘えん坊らしい、と認識を改めた。

「まあ、好きなだけ使えよ。

いくらでも貸してやるよ、背中くらい」

「うん、そうする……」

もはやキャラクターが崩壊してるな……。

こっちが素なんだろうけど。

それはともかく進まなければ。

夜が来る前に。

第三話 予想外の出来事、そして逃走

「はっ、はっ……」

規則的に白い息が口からもれる。
彰は雪山を登っていた。

「大丈夫、アキラ？」

クラリスが心配して聞いてくる。
山に登り始めてから七回繰り返している。

「ああ、大丈夫だ、心配すんな。
……それよりあとどれくらいで着くんだ、ポツケ村には？」

これは登り始めてから初の質問である。
彰はそろそろ着く、という返事を期待してのものだった。

「うん、ここから……、来た道と同じくらい登ったら着くかな」

「はあ……、まだそんなにか……」ため息を吐く彰。

「……それにしても」

クラリスが突然回りを見回した。

「なんだ、なにかあったか？」 彰が尋ねる。

「ここらはポポっていうモンスターがいるはずなんだけど……」

「おい！俺を殺す気か！？」

彰は冷や汗を流してクラリスに言う。

「うっん、ポポはおとなしい草食獣だから問題ないんだけど……」

含みのある言い方でクラリスは話す。

「もしかしたら、なにかあるかも……」

「なにか、って……？」 彰は無意識に声を抑える。

「強いモンスターが、いるのかも……」

「強いモンスター？」

ドスギアノスのことではなさそうだな……。

強いモンスター、と言われてもこの世界のことを知らない俺には想像すらできない。

……ただ、ギアノスやそのボスといった凶暴らしいモンスターが山を降りている。

つまり、そいつらより強いモンスターがいる可能性が考えられる。

「……でも、最近はドスギアノスクらいしか……」クラリスが悩んだ声を上げる。

会話の途中、彰がふと足元を見た

「……クラリス、ひとついいか……？」声が震える。

「どうしたの、アキラ？」クラリスが聞く。

「……今、足元にあるこれって、なにの足跡かな……？」

彰は足元から視線をはずせない。

クラリスも自然と彰の足元を見る。

「こ、れは……。ドド、ブラ……」

途中で言葉が停止される。

二人の影が消えたからだ。

正確には、上塗りされた……、何者かによって。

静かに前を見る二人。

そこにいたのは……。

「グルルルル………」

雪に溶けそうな白い体。

血にまみれる爪。

獲物に突き刺さる牙。

彰より一回り大きいその獲物を軽々とくわえて持ち上げる巨体。

「……ドドブランゴの、足跡……」クラリスが震えながら声を絞り出す。

その怪物、ドドブランゴは息を大きく吸った。

「グオオオオオツツ!!」

「くそっ！」彰が言葉を吐き捨てる。

クラリスを背負ったまま走り出す。

逃げ切れる気がしないが、大人しくやられるわけにもいかない。すぐそこにある洞窟に逃げ込む。

「うおおおっ!!」

半ば飛び込むように洞窟へ飛び込む。ぎりぎりつかまらずに済んだらしい。

「はあっ、はあっ……!!」

突然の出来事に呼吸が詰まる。

「どっする……!!」

彰は必死に考えている。

ふと、クラリスの刀が目についた。

「……クラリス。俺が引きつける、なんとか逃げろ。」

ゆっくりなら歩けるだろ……」

「そんなのダメよっ！勝てるわけない！」クラリスが否定する。

「引きつけるだけだ、問題無い」

「でも……」

クラリスは彰を心配してか、頑なに首を横に振る。

「大丈夫、絶対に死なない。だからお前は……」

「いやよー！」

彰の言葉を遮って叫ぶクラリス。

「私も戦う！アキラと一緒に戦う！」

「クラリス……」。

でもお前、戦えるような脚じゃ……」

クラリスの脚に目を落とす。

だからといってこの脚じゃ無事に逃げられる可能性は低い。
やはり、戦うのは無理か……」。

「……わかった」彰がため息混じりに話す。

「アキラ！」クラリスが顔を明るくする。

「戦わない、どうにかして逃げる方法を考えよう」

彰はクラリスの刀を足元に置いた。
クラリスは安心したように息を吐く。

だが依然、危機には変わりない。

「どうすればいい……」

「道具なら、あるんだけど……」クラリスが大きめの袋に手をかける。

「何があるんだ？」

「えっと、砥石に薬、けむり玉、ツタとツタの葉……、あとキノコとペイントボール、くらいかしら……」

「ペイントボール、って何だ？」

初めて聞く名前だ。

「モンスターにぶつけることで、匂いをつけて大体の位置を察知できるようにするものよ」

「それはつまり、広い範囲で分かるほど匂いが強いってことじゃないか？」

彰は顔を俯かせ考える。

「まあ、そうだけど……」

「このキノコは？」

彰は鈍い朱色のキノコを指差す。

「これは、ニトロダケって言って、高熱を帯びているキノコ。衝撃を与えると爆発するわ」

それは使えるんじゃないか？

匂い、爆発、けむり玉……。

彰はひたすら考える。

そうしてる間にもドドブランゴは彰たちが隠れている洞窟を壊そうとしている。

激しい揺れが二人を襲う。

「……よし、決まった！これでいこう！」

彰が突然顔を上げて叫ぶ。

「き、決まったって、何が？」

「作戦だ、よく聞けクラリス」

クラリスの目を見て話しかける。

「う、うん」

「いいか、まずペイントボールを全てあいつにぶつける。そしてけむり玉だ。」

匂いを遮断して視界も遮断すればなんとか……」

「でも、どうやってここから出るの？」

けむり玉を使ったって目の前に居たらさすがに……」

「そうだ、だから最初にあいつを遠ざけなきゃいけない。

そこで、このニトロダケだ」

彰は刀を持ち上げる。

「衝撃を与えると爆発するんだな？」

「そうよ」頷くクラリス。

「なら、火を着けたら？」

「それでも爆発するわ。

でも、火なんてどこにも……」

「火ならここにあるさ」

ズラックスのポケットからライターを取り出す。

「あつ、ライター！」クラリスが大声で驚く。

「そう、これで火を着ける。

具体的には、まずツタにキノコを結ぶ。

次に、これに入っている油をツタにかける」

彰はツタの先端にニトロダケをしっかり結び、ライターのふたの部分をはずしツタに中のオイルをかける。

「そして、着火する」

言葉と共に火を着ける。

刀をツタのもう片方の端に刺す。

「ペイントボールだ、クラリス！」

「う、うん！」

言われた通りペイントボールをドドブランゴの頭にぶつけるクラリス。

一瞬怯むが、かまわずに暴れている。

「……………今だ！」

彰は大声と共にツタを振ってドドブランゴに投げる。

先端のニトロダケに火が回り、それはドドブランゴの目の先で爆発する。

「グオオオオツ！？」

ドドブランゴは大きく後退し、目を押さええている。

「けむり玉だ！」彰が叫ぶ。

その声に反応してクラリスがけむり玉を投げる。

数秒間でけむりは辺り一帯に充満し、視界を遮る。

「クラリス！」

「うん！」

彰がクラリスを背負って走り出す。

「とにかく、逃げるぞ………」

がむしゃらに走る。

とにかくドドブランゴから逃げなければ。

クラリスは彰に強くしがみついている。

彰もクラリスをしっかりと抱える。

「はっ、はっ………」

今はとにかく、遠くへ………。

第四話 到着、そして休息

「……………」

静かに目を覚ます。

ベッドに横になっていているようだ。

首だけを動かし自分の周りを確認する。

木造建築の、いかにも民家といった印象を受ける家屋だ。

囲炉裏らしきものを中心に、生活感のあまりない質素な室内。

「ここは、どこだ……?」

宙に向かって問いかける。

「ここは借りている私の家よ、おはようアキラ」

突然彰の頭の上から声をかけられる。

「……クラリス、じゃあここは……」起き上がろうとするが上手く力が入らない。

クラリスに手伝ってもらってやっと起き上がる。

「そう、ここはポケケ村。

……アキラは私を背負ってここまで連れて来てくれたのよ」

彰の手をとって微笑むクラリス。
どうやら、無事に村まで来ることができたようだ。

「あ……、お前、脚はいいのか」クラリスの脚に目を向ける。

「あ、うん。完治はしてないけどね」

村の人たちが治療してくれて、と言いながらクラリスは湯のみをベツドの隣にあるテーブルに置く。

彰はそれを両手で持ってそのまま飲む。

あ、お茶だ……。

湯のみを手にとって一口飲む。

「……はあ、なんか緊張が解けたら腹が減ってきた。何かないか？」
湯のみをテーブルに置いて聞く彰。

「もう、仕方ないわね」言って、奥へ入っていくクラリス。

彰はもう一度湯のみを手取る。

「あのニヤけた顔……。何が嬉しいんだか」

クラリスの性格……。

出会った時に聞いた過去からは、考えられない変わりようだ。
この数日間で、驚くほど甘えるようになった。
いままで溜め込んでいた気持ちを、全て出しているようだ。

だが、今のクラリスは自身の過去にキリをつけようとしているのだ

と思う。

あの時に本音をぶちまけたことで、ある意味で自分の考えに気付いたのだろう。

自分がどう思ってるのかということは、案外気付かないものだ。

これを切欠に、自分なりに線引きをして欲しい。

過去と現在の境界をはっきりさせるのだ、未来を向くために。

「アキラ、なに難しい顔してるの？」

食事の支度が終わったようだ。

後はクラリスの問題だ、本人にまかせよう。

「いや、なんでもない。さて、食うか！」

目の前に並べられた料理はどれも美味しそうだ。

肉を唐辛子のようなものとで炒めたもの。

色とりどりの野菜のスープ。

魚の揚げ物など、疲れた体にはどれもが光って見える。

なにより、森に居る最中は碌な物を食べられなかった。

余計に食欲が湧く。

「実は少し前から準備してたの、アキラのために」

嬉しい気遣いだと、感じる。

「へえ……。じゃ、いただきます」

「はい、どうぞ」笑みを浮かべるクラリス。

木でできた箸を使って、唐辛子炒めを一口。

「うまい……。」

これ、クラリスが作ったのか？」

「いえ、違うわ。この料理を作ったのは……。」

クラリスが否定しながら

「……ボクですニヤ、アキラさま」

「ど、どこから声が!？」

クラリスの後に聞こえた声に驚く彰。
きよるきよると探すが見当たらない。

「ここですニヤ。」

……下にいますニヤ」

言われた通り下を見る。

「……うわっ!

ね、猫か……?」

「アイルーのハムといますニヤ。」

よろしく願います、アキラさま……、ニヤ」

そこには、後ろ足二本で立つ猫がいた。
なぜか、当たり前のように喋っている。

「アイルー……？」

「そりゃ一体なんだ？」

猫じゃないのか。

「知らないの、アキラ！？」クラリスは驚いて目を見開く。

しまった、俺がこの世界の人間じゃないってこと教えてなかったんだ。

というか、秘密にする意味あるのか？

そこから中の人間に教えるつもりはないが、言っちゃいけないわけじゃないよな。

クラリスは、もう立派な友達だし。

言ってしまったでもいいんじゃないだろうか。

特に悪いこともないだろうし、タイミングを逃したくない。アイルーのことは気になるがいい機会だ、言ってしまうおう。

「……クラリス、聞いて欲しいことがあるんだ」

彰はクラリスの目を見て話し出す。

「えっ！そ、そんな急に言われても心の準備が……」

何故か顔を赤くし焦りだすクラリス。

何と勘違いしているのか、わかりやすいやつだ。

「言っとくが、告白とかじゃないぞ」

「え！わ、分かってるわよ！」

クラリスは恥ずかしいのか、大声を出してごまかす。

「いいか、実は俺……、別の世界から来たんだ」

言った、はっきりと。

クラリスの反応は？

「……………え？」

まだ理解できてないようだ。

口を開けて呆けている。

「俺はこの世界の人間じゃないんだ」

「それって……………、ホント？」

頷く彰。

さて、どんな反応を返すのか……………。

「……………やっぱりね。」

なんとなく、そうだと思ってた」

返ってきたのは予想外の言葉だった。

それなのに、クラリスはため息を吐いてなんでもないことのように言う。

「どづいづことだ？」

俺が違う世界から来たってことを、お前は知ってたっていつのか？」

彰は驚きを隠そうともせず大声を出す。

「違うわ、ただ……、ライターのことだね。

いくら考えても、あんなもの発明されたら大陸中に広がるはずよ。あの場所にいたってことは、交流が無い国や町から来たとは思えない」

ふう、と一息おくクラリス。

「で、それなら少なくとも普通の方法でこの地方に辿りついたんじゃない、って思ったのよ。

まさか違う世界なんていう答えは想像してなかったけどね」

クラリスが説明は終えた、と言わんばかりに自分の分のお茶を飲む。

「じゃあ、それを分かっているながら俺と？」

それは素直に驚いた。

「アキラは私の素性を知りながら私を救ってくれたわ。脚のことだけじゃなくて、私の……」

クラリスは言葉を止め、彰の瞳をじっと見つめる。

「アキラは私の恩人よ」

これまで見せた中で最高の笑顔で言うクラリス。

「……ったく、めんどくさいやつに恩を売っちゃまったな」

こいつとの縁も長いものになりそうだな……。

「これからも……、よろしく、な」

手を伸ばす。

「うん！こちらこそ！」

クラリスはその手に握って言葉を返す。

本当の意味で友達になった、その瞬間だった。

第五話 考察、そしてハンターとは（前書き）

ちよつと遅かったかな、すいません。

出かけてまして、母親の祖父の墓参り的な感じでした。

第五話 考察、そしてハンターとは

彰とクラリスの二人はひとつのテーブルを囲って食事をしている。アイルーについてはクラリスから教わった彰だが、見たままの特徴なのでなにも新しい発見は無かった。

この世界では当たり前前の存在らしく、仕方ないことだろう。

「ところで、ハンターってどうやってなるんだ？」

彰が木のスプーンでスープをすくいながら訊く。

「アキラ、ハンターになるつもりなの？」

「ああ……。つか、それしかないだろ。」

身分とか問わないんだろ、ハンターは？」

「まあね……。でもその分危険なのよ」「フォークをくるくる回してサシミウオのソテーに刺す。」

「危険なのはわかるけどよ、あんなのと戦うんじゃないよあな」

「アキラはこの世界のことあんまり知らないんでしょう？
なら、もっとしっかり確かめてからじゃないと……」

「まあ、確かに……」彰は小さく首を縦にふった。

「そこの本棚にハンター関係の本ならあるけど……」目線を後ろに向けるクラリス。

「本か。……そういえば、この世界の文字ってどんなだ？」

「大陸で統一されている、現代文字だけだ。」

「そういえばアキラって、普通に話せてるわよね。」

「そこが俺も不思議なところでさ、この世界にいたときから使えるんだよね。」

「ふーん、変なの。」

「変なの、って……。」

「もっとこう、なんかないのか？」

「なんかって？」

「そりゃあ……、なんかだろ。」

「俺のいた世界とかさ、気にならないのか？」

「尋ねると、クラリスは食器を持って突然立ち上がる。」

「あんまり、アキラのいた世界の話はしたくないな……。」

「クラリスは、立ち上がって顔を背ける。」

「思い出したら、帰りたくなるでしょ……？」

「と言うと、クラリスは奥のキッチンへ行ってしまった。少し、気を悪くしたらしい。」

「……元の世界か……。どうするかな……」

正直言つて帰る必要はない。

親は完璧放任主義で、特別親しい人間もない。

クラリスは、俺と離れたくないらしい。

態度でなんとなく分かる。

「まあ、急いで決めなくてもいいか……」

食べ終わった彰は、ベッドに座り横にある本棚から本を取り出す。

「さて、どんな文字だか……」

適当なページを開く。

すると、見たことも無い文字がびっしりと書き込まれていた。

だが、なぜか。

「分かる……。この文字が……」

言葉の意味が理解できる。

ハンターについて、という題名。

「なんで、って言っても始まらないけど。

絶対あの玉が原因なんだろうな……」

恐らくだが、大体の見当はついていた。

あの玉が放つ光に包まれたとき、頭の中の情報が入れ替わる感覚がした。

根本的な人間性は変わらないが、いままで知らなかった情報が詰めこまれた。

まるで、この世界に適応させるように。

「ま、考えても仕方ないか」

それより本を見よう。

ハンターについて。

ハンターになるには、ハンターズギルドでのハンター登録が必須です。

それをせずにハンターを名乗り、狩りを行った場合は罪を問われます。

ハンターズギルドは、各地に出張支部を設置しています。

その支部でも、ハンター登録は可能です。

ハンター登録には本人の右手の親指の拇印と、千ゼニーが必要となります。

これがなければ登録はできません、気を付けましょう。

「千ゼニー、つてなんだ？」

と、そこにアイルーのハムが食器の片付けにやってきた。

あのためハムとは話をしたりしていた。

「あ、ハム。ちょっといいか？」

ハムはこちらに歩いてきた。

「アキラさま、なんですニヤ？」首を愛らしくかしげる。

「ゼニーってさ、お金のことだよな」

「そうですニヤ。」

「この世界では、統一してゼニーというお金が使われていますニヤ」

「へえ……」

ハムは彰が違う世界来たということはすでに知っている。

日ごろの会話で普通に話していた。

特別隠すことでもないの、それなりに親しくなれば話すようにはしている。

だが、あまり言いふらすことは厳禁だろう。

無用な混乱をまねくことになるだけだ。

「どつやって、稼ぐんだ？」

「ハンター登録のために千ゼニー欲しいんだが」

「それくらいなら、クラリス様に出してもらえばいいのにニヤ」

「千ゼニーってそんな大きい額じゃないのか？」

「まあ、この料理一回が百ゼニーくらいですかニヤ」

「あ、そうなのか……」

それならクラリスに頼むことにしよう。

ついでに誤解みたいなものをかけてるので、それも解きたい。

「じゃあ、クラリスに頼んでみるよ。ありがとな」

「いえいえですニャ」

そう言っつてキッチンへ入るハム。

それと入れ替わりにクラリスが出てきた。

「クラリス、ちょっといいか。」

ハンター登録についてなんだけど……」

「……なに？」突っ慳貪に返すクラリス。

「……あのな、俺は今のところ帰る気はないぜ。」

帰る方法だつて分からないしさ、ずっとここに居てもいいと思つてる。」

……だから、そんなにふくれるなよ」

「……分かった」

なんとか納得したようだ。

「それで、結局ハンターになるの？」

「ああ、そうするよ」

それはもう決定している。

「じゃあ、集会所に行きましょうか。」

ギルド支部が置いてあるの」

「え、もういくのか？」間拔けな声を出す彰。

「だってすぐ済むわよ？」

「ハンター登録なんて形式みたいなもんだから」

「まあいいけどよ」

「じゃあ、行きましょ」

なにやら、すんなり決まってしまった。

拍子抜けだな……。

第六話 集会所の人々、そして登録完了

「ここが、ギルド支部のある集会所か……」

彰の目の前には、村の中でも大きめのどっしりとした建物が構えていた。

比較的新しいようにも思える。

「私もポケケ村は長くないけど、案内するわ。ついてきて、アキラ」

クラリスは一度立ち止まって、両開きの門を開ける。

「わかった」歩みとともに返事を返す彰。

クラリスが門の奥に消えていくのを見て、彰も恐る恐る入る。

「……あれ？」

そこには、集会所という名前には似つかわしくない閑散ぶりが広がっていた。

中にいたのは。

「あら、いらっしやい。」

「……初めてお越しの方ねえ、クラリスちゃんの知り合いかしら？」

「友達よ、マネージャー」

マネージャーと呼ばれる女性が立っていた。

耳が長く、見た目は若いが、何歳かはわからない。

この数日間ですごったことだが、この世界にいるのは、人族、アイル族だけではない。

そのほかに、竜人族という種族がいるらしい。

もちろん、アイル族以外のモンスターを除いてだが。

それで、その竜人族というのは長寿の種族だというのだ。

この村の村長は、村が興されたときから数百年生きているという。

この女性も竜人族だが、その中でもまだ若いということしか分からない。

年齢を直接聞くのも憚られるので、やめておく。

謎のままでも、不自由ないだろう。

「あらあら、クラリスちゃんにも春が来たかしら」

「は、春って、そんな……」クラリスは顔に手を当てて頬を赤らめる。

「なに本気で恥ずかしがってたんだ、冗談だろうが」

クラリスの頭を軽く小突く。

「いったあい……、なにをするのよう……」上目遣いで頬を膨らませながら睨むクラリス。

「……始めまして、アキラ、アサヒっています」

小さくお辞儀をする彰。

「ああ、あなたが……。」

礼儀正しい子ね、この年で珍しいわ。

よろしくアキラ、わたしはこのギルド出張支部でギルドマネージャーを務めているものです。

気軽に、マネージャーって呼んでね」

「はい、マネージャー。」

よろしく願います」

少し驚いた顔で、なるほどという表情をする彰。

自分がこの村である程度有名なのはわかっている。

「ちよっと、無視しないでよ……。」

頭をさすって訴えるクラリスだが、彰は無視する。

「それで、今回ハンター登録をしに来たんですが。

ここで、できるんですよね？」

「あなたが、登録を受けるのかしら？」

「はい、そうです。」

生活するには、何らかの労働が必要なのは仕方ないですね」

「ふふ、面白い子ね。」

わかったわ、じゃあ……。」

三千ゼニーあるかしら？」

彰はマネージャーの言葉を受けてポケットを探る。

「えっと……、はい、ここに」

すぐにカウンターのの上に鉄の硬貨を三十枚置く。
不純物が多く入った、質の悪い鉄でできた親指サイズのものだ。

「はい、確かに受けとったわ。」

次は、この紙に右手の親指の拇印をお願いね」

彰は用意された朱肉らしきものに親指をつけて、紙に押す。

「……これでいいですか？」

「はい、大丈夫よ。」

ちよっと待っててね、渡すものがあるの……」

そう言っつて、暖簾がかかった奥に入っつたマナージャー。

「なにがもらえるんだ、クラリス？」

……っつて、お前まだふてくされてたのか……」

「だっつて……、アキラが無視するから……」

クラリスはいまだに睨んでいた。
相当構つて欲しかったようだ。

「悪かつたよ……」。

帰つたらいくらでも話してやる……」

「あ、言つたわね！約束よ、アキラ！」

顔をアキラの顔に近づけるクラリス。

「わかった、わかったから近いっつの」

顔を遠ざけて言う彰。

「まったく、最初からそう言えばいいのよ!」

しかし、聞こえていないようだった。

そうやって話しているとマネージャーが奥からやってきた。

「おまたせ、できたわよ。」

「これが、あなたのギルドカード」

マネージャーは手に平に乗るサイズのカードを差し出してきた。触ってみるとひんやり冷たい、紙ではないようだ。

「マカライト鉱石を加工したものよ。」

再発行にはお金がかかるから気を付けて頂戴ね」

初めて聞くものが出てきたがここはスルーしよう。

「へえ、ありがとうございます」

「簡単な証になるから、ハンターとしている時は身から離さないでね」

なるほど、これがハンターの証になるのか。

「わかりました、気を付けます」

「じゃあ、これでハンター登録は終わり。
クエストを受ける時はこの集会所か、村長に言ってね。
最初は村長の所へ行った方がいいと思うわ」

「なぜでしょうか？」

「比較的簡単だからよ、集会所より」

新しい情報だ。

ちなみに、会話に出てきたクエストというのは、ハンターが受注する際の依頼の別称のことである。

このクエストを受注してハンターは色々な仕事をこなすのだ。

これも、村にいる数日間に学んだことの一つだ。

「クエストはまた今度にしましょう。

装備を持ってないもの、アキラは」

「そうだな」

「じゃあ、そろそろ帰るか……」。

彰たちは、門に向かって歩き出す。

「あら、帰るのかしら？」

「はい、今後の相談もしたいですしね」

「お話もね！」クラリスが忘れるな、と針をさす。

「はいはい」

こいつは段々幼児退行している気がする……。

「じゃあ、また来てね。」

今度は、ハンターとしてね」

「はは、そうですね。」

ハンターとしてまた来ます」

そういつて門から集会所を出る。

登録も済ませて、ハンターにもなれた。

これで、ようやく働けるわけだ。

何もしないで過ごす数日間は、楽ではあったがつまらなかった。
はやく、色んなものを見てみたい。

彰の心は未知への好奇心があふれていた。

元の世界では、出会えないなにかが待ってるはずだと。
果たして、彰はハンターとして生きてゆけるのか。

まだまだ異世界での物語は始まったばかりだ。

第七話 初めての狩り、それは密林（前書き）

書くのが遅いのは、執筆してから時間を置いてもう一度見直すからです。

時間とは数時間から数日間です。

書いてる最中は作品のおかしいところに気付けないんです。

第七話 初めての狩り、それは密林

「アキラ、密林に行きましょう！」

と、いきなり目の前で叫ぶピンクの長髪美人。

クラリス・フィンという名のハンターである。

「……密林？」

間抜けに口を開けて呆けてしまっているのは、旭彰。
俺の本名である。

「テロス密林っていう、狩場があるのよ！」

「わかったから、取り敢えず大声を出すのをやめろ」

「あ、ごめん……」

クラリスの顔に手を当てて押し戻す。

大人しく顔を離すと、椅子に座り落ち着いて喋りだす。

「それで、装備もハンターシリーズ一式揃えたし……」

俯いてちらちらとこっちを見ながら話すクラリス。

「良いクエストがあったから、もしよければ、なんて……」

「……それはいいけどよ、なんであんなに喜んでたんだ？」

予想はつきながらも一応訊いてみる。

「それはもちろん、アキラの初クエストだからよ!」

「やっぱり……」

そう、俺のハンター生活の始まりだ。

第七話 初めての狩り、それは密林

「アプトノス?」

「そう、アプトノスっていう草食竜よ。

だから竜車って名づけられてるのよ、これ」

「なるほどね……」

今、その竜車に揺られながら目的地に向かってるのは、俺とクラリスの二人だ。

大きな荷台に座り流れていく景色を見ながら進んでいる。

テロス密林までは、この今使用している竜車ではおおよそ二日間かかるらしい。

その間、モンスターに襲われるのではと思ったが、この時期はモンスターが出てこない道を使っているとのことだ。恐らくその辺りも考慮して今回のクエストを選んだのだろう。

そして只今その二日目であり、道が少しずつ密林らしい景色に変わっている。

「ドドブランゴに比べたら怖くないけど……」。

段々おどろおどろしい感じがしてきたような気もするな……」

「今回のクエストは採取クエストだから大丈夫よ。」

大型モンスターの姿も確認されてないし、問題ないわ」

「なら、いいけどよ……」

「で、その採取するものは……、特産キノコよ」

「キノコ？」言葉を繰り返す。

「そう、密林だけじゃなくて様々な地域に自生しているキノコなの。特産キノコの採取を依頼するクエストはよくあるのよ」

「へえ、じゃあクラリスもやったことあるのか？」

「もちろん、あるわよ」

さしづめ初心者用のクエストってところか。

「あ、到着したみたいよ」

クラリスが進行方向を指差して告げる。
俺はそれに従って前を向く。

「あ………」

ひたすら進んだ先にあったのは。

「……絶景、だ………」

上から見下ろす形で密林を見渡す。
そこは、目が霞むほど遠くまで広がる樹木で緑に染まっていた。
鳥達は騒ぎたてながら群れで一斉に飛び立ち、獣の遠吠えが時折聞
こえてくる。

雄大、とはまさにこのことだった。

元の世界でも易々とは目にかかれない。

まるで、数多の命の息吹が聴こえてくる様だった

「はじめてだ、こんな感覚………」

クラリスの方を見るとなにが可笑しいのか、微笑みを浮かべている。

「……ま、キノコ採りはすぐ終わるけどね。初めての狩りだもん、
そうなるわよ」

「ああ、そうだな………」

「あとはベースキャンプまで、ちょっとで着くわ」

「ベースキャンプ？」

やはり始めて聞く単語だ。

「モンスターが襲ってこない場所。

いってみれば拠点かしら、ハンター共通のね」

「なるほどな……」

まだ、竜車に揺られないといけないのか……。

尻が痛いんだけどな……。

「慣れるまでよ、アキラ」

俺の挙動で気付いたのか、苦笑して話しかけてくる。

「ああ、わかってるさ……」

初めての狩りで気が思いやられる。

ああ、痛い……。

第八話 何者かの気配、それは熱戦の始まり（前書き）

つい最近東方紅魔郷を買いました。

一週間ほどプレイしましたが……、normalがノーコンティニ
ユークリアできないんだ……。

第八話 何者かの気配、それは熱戦の始まり

「特産キノコは赤い色で、この時期はかさが開いてるからね」

「おう、了解」

二人は生い茂る原生植物をかきわけながら採取を進めていた。

彰の持っている武器はハンターカリングという片手剣で、草を刈るのには適した形だった。

「あと、かさが開いてない赤色のキノコがあると思うけど、それは二トロダケよ」

「ああ、あのときの……」

彰はポケット村を目指して雪山を登っているときのドドブランゴとの戦いを思い出していた。

戦いと呼べる代物だったかは二人にも分からないが……。

「じゃあ、取り敢えずここら一帯で探しましょう。」

「ここなら危険なモンスターは出ないし、キノコの群生が多く見られるわ」

「はいよ、かさが開いた赤いキノコだろ。すぐ見つかるさ」

「そうね。でも、モンスターには気を付けて」

「わかってる、ハンターの基本だろ？」

彰は、村ではクラリスにハンターとしての基本を教えられていた。クラリスは彰の言葉に笑顔を浮かべながら歩き出した。それを見てから彰も反対方向へ注意深く下を見ながら歩き出した。

「……あ、いつぱいあるじゃん、特産キノコ」

キノコが群生している場所を見つけるのにも時間はかからず、二人は順調に採取を続けた。

そして約一時間後。

その後も場所を変えながら特産キノコを採取していた。目的のキノコだけでなく様々なものを採取していたが、クラリスに言われて彰は岩壁の前に来ていた。

「ここでは、ピッケルによる採掘が出来るわ」

「なんだ、鉄とかが採れるのか？」

「それだけじゃないわ。」

大地の結晶とかマカライト鉱石とか……、ハンター生活には最も重要なことよ」

「ああ、マカライトな。」

覚えてるぜ、お前のハンター講習で習った」

「ええ、確かに教えたわ。」

そして、これは実践の本番よ」

クラリスは岩壁に近づいてピッケルを振りかぶる。

「…………ふっ！」

そしてそれを思い切り振り下ろす。

亀裂めがけて振られたピッケルは岩を削って食い込んだ。

それを慣れた手つきで外し、壁からは鈍く光が反射していた。

「これが鉄鉱石。で、こっちが大地の結晶よ」

「…………本当に女か、お前？」

「ど、どどういう意味よっ！」

「…………いや、別に…………」

と、そのとき近くの茂みから音がたつ。

「なに！？」

…………アキラッ、こっちに来てっ」

声を抑えて彰に手招きをするクラリス。

「分かった」

彰は指示に従いクラリスの傍に寄る。

「…………一体、何がいるんだ？」

「……………」

クラリスは彰の質問にも黙っている。
ただ、口に手を当てて、喋るなという意味を示している。

「分かった……」

彰は腰に提げている武器を抜いて手に取る。

クラリスはもうすでに太刀を持って構えている。
最大限の注意をはらい草むらを見つめる。

と、大きな茂みと共に何かが動く気配がした。

「……来るわよっ！」

クラリスは言葉とともに動き出す。

そしてクラリスが向かった延長線上からモンスターの影が飛び出た。

そこにいたのは……。

「ランポス……」

それは青い鱗に鋭い爪を持ったギアノスの原種。

密林の蒼き狩人、ランポスだった。

赤いトサカも特徴の一つである。

リーダーとしてドスランポスが存在する。

「だったっけか……」

彰は図鑑の情報を思い出しながら、片手剣を手に威嚇するランポスを注視している。

「この時期の密林はランポスが出現しないはずよ！」

雪山のドドブランゴといい、なにかがおかしい……！」

「今はそれどころじゃないぞ、クラリス……！」

「ええ、そうね……！」

二人はじりじりと距離を詰める。

ポツケ村の訓練所にて学んだ小型モンスターに対しての基本だ。

実戦以外を一通り学んだ彰だが、ランポスを見るのも初めてだった。

雪山でもギアノスの姿は確認できなかった。

「ハアッ！」

突然切りかかるクラリス。

しかし素早く後方に跳躍して回避される。

「くっ……、すばしっこいわね……！」

「まかせろ！」

「ア、アキラ!？」

彰がランポスの頭を目標に一気に切りかかる。

「ギヤアッ!？」

太刀よりも初動速度に優れている片手剣は風切り音とともにランポ

スの頭蓋に命中した。
ランポスは脳をやられて絶命する。

「いやな感触、だぜっ！」

即座に次のランポスに斬りかかる。

「やるじゃない、アキラ！」

……私も、負けてられないわねっ！」

垂直に刀を振り下ろすクラリス。

体重が乗った剣筋は彰の方を見ていたランポスの首を切り落とす。

「雪山のあのときから、感覚が研ぎ澄まされてる……」

ふと、カリंगाを握り締める。

ハンターという職業にやりがいを感じていた自分に、気付いた。

「……うおおっ！」

一匹、また一匹と倒していく彰とクラリス。

着実に的を殲滅していった。

「これで、最後だ！」

「ギイアアアッ！」

最後の一体を倒した彰。

「……ふう、なんとかやれた……」

「そうね、アキラは強いわ。
才能があるのかもしれないわね」

「はっ、そうだったらいいけどな」

「ふふ……」

微笑みながら武器の血を掃うクラリス。
それを見て彰も片手剣を振って血を落とす。
二人とも息切れをしながら、座り込む。

「なんとか、乗り切ったわね」

「ああ……」

……そういえば、ドスランポスは、いないのか？」

「一応、注意はしていたけど……。
もしいるなら、これだけの子分がやられて黙っているはずがない
わ。」

たぶん、いないと見ていいと思うけれど……、不安ね」

「そうだな……」

彰は確かな充実感を感じていた。
始めた理由は単純で、初めての狩りに過ぎないが。
自分の胸の中にしつかりとやりがいを感じていた。

「俺、ハンター向いてるかもな……」

「まだ早いわよ、調子に乗っちゃって」

笑って彰をからかうクラリス。

「なんだよ、いいじゃん別に……」

「あつ、もしかして拗ねちゃった？」

「拗ねてないっ！」

クラリスは楽しそうに、彰はちょっと拗ねながら、話し合う。

だが、波乱はまだ始まりに過ぎない。

密林の熱闘はまだ続く……。

第九話 脅威、それは大きな影として

戦闘の数分後、ランポスの皮などを剥ぎ取った後である。

「じゃあ、ベースキャンプに帰りましょうか」

「そうだな」

ついさつき、ランポスの群れに襲われたばかりの彰とクラリスは、クエストを終えるためベースキャンプに戻るうとしていた。

「早く帰るには……、来た道に戻るよりもこっちの崖から降るほうがいいわね」

海の方に振り返るクラリス。

「崖を降るって、どうやって?」

「長いツタがかかっているのよ。」

それを降っていくとベースキャンプに繋がっているわ」

少し考える素振りをする彰。

「……まあいいか」

「なにか、不安なことでも?」

クラリスは彰の顔を伺う。

「いや、崖降りに関しちゃう不安しかないけどよ。
気がかりなのは、ランポスの群れといい、季節と合致しないモン
スターの出現だ」

「まあ、それは確かにね……」

腕を組み、考え込むクラリス。

「この数日間は、知識を蓄えることに従事していたからわかる。

明らかに通常の状態じゃあないだろ、このところのモンスターは」

「ドドブランゴの時からおかしいとは思ってたわ……」。

あの時期、ドドブランゴは繁殖のために巣にこもるはずよ。

餌を狩るのだって、他のモンスターが眠りについてから狙うはず

……」

「このランポス達もおかしいんだよな？

たしか、この時期の昼の密林は草食種のみが活動しているはず。

何らかの事情により本来の習性に逆らって活動しなければいけな
かった、ということが伺える」

一度クラリスの方を見て、すぐに前を見る。

「……つまり、夜には活動できないんだ。

ドスランポスよりも力が強いものが密林を支配している可能性が
ある。」

「そうね、でも何かあったらギルドから報告があるんじゃない……」

途中でクラリスの言葉が止まった。

「おい、どうした？」

クラリスの顔を覗き込んで訊く彰。

「あ、あれ……」

クラリスは呆然として、力が抜けた声で前を指す。

「なんだ……？」

不思議に思って人差し指が指す方向を見た。

「あれは……、ドスランポスの……！」

そこには、ランポスより一回り大きい体と鋭い爪を持つドスランポスが倒れていた。

「死んでるわ……」

「鱗が剥げて、皮膚が爛れてる……」。

「一体どうやったらかんな風になるんだ……？」

彰が死体を触る。

「まだ焼けて新しい……」。

もしかして、俺達と戦っていた時にこっちに向かって……」

「アキラ！」

突然、クラリスが大声を出した。
なにやら上空を見て、驚いている。
つられて彰も上を向く。

「なっ……！」

雲に届きそうだ、というほどに高く。
大空を滑空している影。

「大型モンスター……！」

それはゆっくりと二人をめがけて降りてきた。

「グアアアアア……！」

鮮やかなピンク色の鱗。

巨大な嘴が特徴的なモンスター。

「怪鳥、イヤンクック……！」

「こいつが今の密林の支配者、ってわけね……！」

イヤンクックが翼を広げて降り立ってきた。

「グアアアアアア！」

地面に脚を下ろしてなお、翼を大きく広げている。
眼は、まっすぐに彰とクラリスの二人を見下ろしていた。

「威嚇してるんだわ……」

「つまりこは、こいつのテリトリーってことか……」

二人は小さい声で会話しながらも自らの武器を抜く。

「来るわよ……」すでに太刀を構えながら呼びかけるクラリス。

「初めてのクエストから、大型モンスターかよ……」

彰は注意深くイャンクツクを観察する。

「カ□□□□……」

「なんだ……？」

イャンクツクは顎を上げて奇妙な声で鳴いている。

「クアアアアア……」

すると、突然口内から燃え盛る火を吐いてきた。

「うわっ！？」

位置が比較的近かった彰はかすめながらも避ける。

「くっ！」

クラリスも横に転がって牽制しながら回避する。

火の玉が地面に落ちると、植物を焦がして火は消えた。液体が燃焼しているものらしく、火はすぐに消えた。

「火炎液よ！触ればひどい火傷を負うわ、気を付けて！」

「了解、つと！」

彰はイヤンクツクの側面に回りこみ、斬りかかった。しかし、背中の中殻は比較的堅く、あえなく弾かれた。

「くそっ、堅いぞこいつ！」

「腹を狙って、アキラ！」

イヤンクツクは腹部が柔らかく、刃物の武器ならば一番の弱点になる。

「わかった！」

彰が相手と交戦する間、クラリスはカバンから手のひらほどの玉を取り出した。

「ふっ！」

投げられたそれは見事にイヤンクツクに命中する。当たった場所からは異臭が放たれている。

「ペイントしたわ！」

それとともに翼に斬りかかるクラリス。

「オーケー！」

「それ何語、よ！」

「グアアアアアア!?」

最初の一太刀が見事に翼を切り裂き、血飛沫があがる。だが、それを受けたイヤンクツクの様子がおかしい。

「まずい、怒ったわ！」

「そりゃあ、あれだけ傷つけば怒るだろ」

「そうじゃなくて、怒り状態になるってことよ！」

怒り状態、それはモンスターが感情の昂ぶりにより能力を一時的に高める状態を指す。

「まじかよ……!!」

彰は思わず冷や汗をかく。

「グウワアアアアア!!」

イヤンクツクは激しく地団駄を踏み、頭を大きく振っている。怒り状態になったときの、イヤンクツクの行動だ。

「まだまだ、かかりそうだな……」

突然始まったイヤンクツクの狩り。
準備不足の中、クエストを終えることが出来るのか……。

第十話 ハンター、それはきつと

「刃がボロボロで、研がないと！」

「でも、どっちかが離れたらやられるわ！」

片方が囷となって気を引きつける、片方がその間に攻撃をしかける。これがサイクルしてイヤンクックに対して優勢を維持していた。

しかし、お互いの体力を無視すれば削られていくのはこちらの武器の切れ味のみ。

徐々に押されていることを二人は感じていた。

「このままじゃ、負けるぞ………」

彰は考えを張り巡らせながら囷となってクラリスに注意が向かないように戦っていた。

「……一回離れよう！」

「これじゃ埒が明かない！」

「くっ！……わかったわ」

「よし、こつちだ！」

彰は掛け声とともに洞窟へ走った。

クラリスもそれにつられて草の中を駆け抜ける。

入り口が小さいため、イヤンクックは入って来れないという考えに

よっての行動だった。

二人が洞窟に逃げ込むとイヤンクックは少し辺りを見回した後、ゆつくりと飛び去った。

「この武器じゃ無理があるな……」

彰は自分が握り締めているハンターカリングを見て、呟いた。

「そうね、この切れ味じゃ歯が立たないわ」

イヤンクック自体は、大型モンスターの中では弱いと聞いた。ただ、曲りなりにも今の密林を支配しているモンスターだ。やわな武器じゃ傷をつけるのが限界だ。

「……特産キノコは必要な分採ったんだ。クエスト終了して帰るわけにはいかないのか？」

「あいつさえいなければ問題ないわ。密林から抜けるにはイヤンクックが邪魔よ」

「つまり、戦うしかないって事か……」

準備しようにも道具を持ってきていない。

武器一つで、イヤンクックを倒さなければならない。

初めての实線で、こんな目に会うことになるとは、考えもしていなかった。

しかし、くよくよしても始まらない。

「……武器を研ぐか。
なあクラリス、砥石持ってないか？」

彰がクラリスに尋ねるが返事が無い。

「……クラリス？」

不思議に思っただけクラリスの方へ振り返る。
クラリスは脚を押さえてうずくまっていた。

「クラリス！」

「どうしたんだ!？」

「くう……！」

「脚をやられたみたい……」

「見せてみる……」

彰がクラリスの脚の装備をはずす。

「……これは……!」

脛の側部が大きく腫れている。
歩くことはおろか、動かす度に痛みが走るようで、クラリスは顔を
顰めて苦しんでいる。

「ごめんなさい、これじゃ戦えないわ……」

「……取り敢えず、ベースキャンプに行こう」

クラリスを背負って立ち上がる彰。

彰も決して無傷ではないが、そんなことを言っている場合でもない。クラリスの安全が最優先だ。

「なあ、クラリス」

「どうしたの、アキラ？」

彰は歩きながらクラリスに話しかける。

「二回目だな、これも」

「……そういえば、そうね」

奇しくも雪山の時と同じ状況になってしまった。

クラリスは歩けない。

その中でドドブランゴと対峙する。

違うのは彰がハンターになったということだけ。

クラリスはこのクエスト中は戦えない。

初めてのクエストで、彰は一人で戦うことになってしまった。

「……アキラ」

クラリスが話し出す。

「……クエストリタイアをすることも出来るわ。

今回はもう、やめましょう」

彰が足を止めた。

「こんな状況じゃしかたないよ……。
ハンターは死なないことも重要よ……?」

「……クラリス、俺は」

元の世界では絶対にありえない状況だ。
そんな中逃げ出しても誰も文句は言わないだろう。

でも、それじゃ駄目なんだ。
あくまで俺は。

「俺は、ハンターなんだ」

「アキラ……」

「ハンターはモンスターと立ち向かう職業だってことは、理解して
る」

彰の顔に陰が差す。

「初めての狩りが、あんな強敵と当たったのは予想外だ。
……それでも」

「……」

「ここで逃げたら、俺はハンターじゃなくなる。
……弱いままじゃ、嫌なんだ。俺ってやつは」

長い独白を言い終えて、彰はクラリスの方を見る。

クラリスは少しの間黙っていたが、少しして口を開いた。

「……わかったわよ。」

ほんと、強情だよな、男って」

憎まれ口が叩きながらも、あくまで笑っている。

「……嫌われ者のくせして、男を分かるのか？」

「あ、ひどい！」

そんなアキラは、こうしてやる！」

クラリスが彰の顔を引っ張る。

「いたたたた!?!」

「……ふふっ」

「……なに笑ってんだ」

「別に。」

……それより、絶対負けないでよね」

「ああ、約束するよ」

「絶対よ」

「絶対だ」

それを聞いてクラリスは微笑んだ。

彰も笑う。

笑いあう二人は支えあう二人。

戦いの前の、僅かな安らぎに身を委ねる彰だった。

第十一話 勝つこと、それは奪つこと（前書き）

めっちゃ考えて書き上げました。

彰はまだ一般人に近いので、派手な戦闘はできません。

第十一話 勝つこと、それは奪つこと

密林のある洞窟の中。

彰はペイントボールの匂いを辿ってそこに着いた。

そこでは手負いのイヤンクツクが体を休めるため眠っていた。

気配を絶つよう心がけて近づく。

そして、イヤンクツクの傍らで立ち止まる。

少し、下を向く。

すると、大きな嘴と顔が見えた。

安心しきって眠っているのがわかる。

まるで、この密林の王は自分だと言わんばかりだ。

自然に、剣を抜く。

そこには意思など存在しないかのように。

そして上に構える。

じっ、とイヤンクツクを見つめる。

寝息を立てて呼吸をしている。

息を吸ったときは、筋肉が少し緊張している。

それでは、だめだ。

息を吐いたとき。

筋肉が一番に弛緩したとき。

それが、必殺の瞬間。

やはり自然に、自分の息が止まっているのを彰は感じた。
そして観察する。

まるで、一秒が無限に感じられた。

吸う、吐く、吸う、そして……。

「……………ふっ！」

一閃。

息を吐き終わる寸前を狙った。

手ごたえはあった。

今までで最高の斬撃だった。

それなのに。

「ギャアアアアア！」

死なない。

倒れない。

常識が、通用しない。

「……………うおおっ！」

彰は再び斬りかかった。

相手が混乱しているうちに、倒す。

一歩下がってから、飛び込んで縦に振り下ろす。

「ゲアアアアアッ！」

翼に命中した。

確実にダメージは負っている。

「はっ、はあっ！」

連続して斬りかかる。

一気に畳み掛ける。

「グアアアアア！」

しかし、イヤンクックも斬られてばかりではない。
火炎液を吐いて応戦してくる。

これを食らったら、無事ではすまない。

「くっ！」

間一髪で避ける。

決してモーションは大きくしない。

最小限の動きが最大限の働きをする。

「弱点は、腹だろっ！」

積極的に弱点を突く。

「ギャアアアアッ!？」

イヤンクックは自身の最も軟らかい場所を斬られ、悶え苦しんでいる。

さらに、斬る、斬る、斬る。

「食らえっ!！」

彰の猛撃は、弱点を正確に突いていた。

一撃一撃が確実に相手の生命をけずっている。

このまま勝負は着くと思われたが、しかし。

「…………グワアアアッ！」

「うわっ!?!」

突如、イヤンクツクが地団駄を踏んで怒り出した。さきほどにも見た、怒り状態だ。

怒り状態は、モンスターの能力が著しく上昇する。先ほど戦闘のダメージも残っているので、なおさら早く怒ったということだ。

彰はところかまわず暴れるイヤンクツクから離れる。

「これじゃ、攻撃できねえぞ……………」

そして、翼を振り回して暴れるのをやめたイヤンクツク。すぐに、彰に向かって突進してきた。

その動きたるや、人間にはかなわぬ動き。

彰は、避けるのが精一杯だった。

「うわっ!」

横っ飛びで避ける彰。

イヤンクツクは休むことなく、ひたすらに突進を繰り返してくる。

それをまた避ける彰。
しかし、何度も突進は続く。

「ハア、ハア……」

それを何回も繰り返す内に体力が減ってくる。

相手も疲れてはいるが、モンスターと人間では体の造りが違う。
彰が押されているのは、火を見るより明らかだった。

「ハア、ハア……」

「……くそ……」

攻撃できずに回避をするだけ。

このままでは倒せないばかりか、倒されてしまう。

それだけは、絶対できない……！

彰は必死に頭を働かせる。

「……月並みだけど、やってみるか……」

突然叫ぶと、彰は後ろに走り出す。

そして、岩壁に背を向けて剣をしまう。

「こつちに来い、イヤンクック！」

大声でイヤンクックを挑発する。

後ろの堅い岩壁に、突進させようという考えらしい。

イヤンクックは、彰めがけて突進してくる。

彰はタイミングを見て横に飛び込んで避けた。

「いいぞ、そのまま突っ込め！」

イヤンクツクは猛然とした勢いで岩壁に突進する。が、しかし、突然止まってしまった。

「なっ!?!」

当然、思惑が外れた彰は驚愕を顔に浮かべて焦る。イヤンクツクは、嘴を上に向けて奇妙な声を上げている。

「カ□□□□……」

嫌な予感がしてさらに前に飛び込む彰。後ろからは、何かが蒸発したような音が聞こえる。

「くっ……!」

自分がいた場所を見る。

そこには、焦げた草花と地面があった。

実は、大型モンスターは突進するときも壁や崖には近づかない習性がある。

しかし、彰はそれを全く知らなかった。

作戦は失敗に終わった。

「……はははははっ!」

だというのに、彰は笑っていた。
そして、もう一度岩の壁の前に立つ。

「もう一回だ、こっちに来いっ！」

無駄だと分かった作戦をもう一度繰り返す彰。
その顔はやはり笑っていた。

「ゲアアアアッ！」

イヤンクツクは突進してくるが、やはり途中で止まる。
それはさっきと全く同じ。
なのに、彰は笑っている。
勝てないと分かって狂ってしまったのか。

「…………ふっ！」

否、そうではなかった。

彰は一瞬で片手剣を抜き、腰に構える。

「カ□□□□□……………」

イヤンクツクは嘴を上げて鳴き声をあげる。

彰の予想通り、全く一緒だ。

火炎液の事前に行う行為、それは大きな隙にもなる。

「まんまとかかったな、頭でっかち」

彰は腰を落とし力を溜める。
そして。

「はあああああっ!!」

遠心力で、さらけ出された腹を斬る。

「…………ギヤアアアアッ!？」

その一撃は見事に決まった。
斬った箇所からは血が噴き出し、イヤンクックは大きな悲鳴を上げた。

「これで、終わりだっ!!」

そして、首めがけて全身全霊全体重を乗せた一撃。
鋭い風切り音とともに、振り下ろした。

「うおおおおっ!!」

「グアッ……………」

小さな断末魔を上げて倒れるイヤンクック。
そして、絶命した。

「…………倒した…………」

座りこむ彰。

力が抜けて立つてられなかった。

「倒したぞ、クラリス…………」

ここにはいないクラリスに向けて呟く。

「約束は、守ったからな」

第十二話 戦いの後、それは祝福と共に

何かに揺られている。

そう思って彰は目を覚ました。

起き上がると思ったが、体が動かせない。
目だけを動かして周りを見る。

ゆっくりと流れていく広い草原。

遙か向こうにそびえる無数の山脈。

その景色には見覚えがあった。

「密林に来るときの、道……？」

そして彰を揺らしていたのは、ポツケ村に向かってその道を戻る竜車。

だけではなく、寝ぼけて彰に寄りかかる、クラリスだった。

第十二話 戦いの後、それは祝福と共に

まずは目の前で寝息を立てる桃毛をどうにかしなきゃいけないだろう。

「おい、起きろ」

彰がクラリスの頭を小突く。

「……………きゃう!？」

クラリスは叩かれた部分を押さえて奇妙な声を上げた。家に居る時、つまりクラリスの家に居候している時のことだが。朝はいつもクラリスに起こされて目覚めている。

今、少しだけ毎朝のクラリスの気持ちがあつた気がする。

「ちよつと、なにするのよ!？」

「怪我人を差し置いて寝やがって、薄情者め」

冗談だが。

「私だって怪我してるわよ!」

「んなもん軽症だ」

彰はクラリスをからかって遊ぶ。

久しぶりの感覚に軽い感動を覚えながらも口は動く。

「……まるで、自分は重症みたいな言い方ね」

「その通りだろうが!？」

「てつきりくたばったのかと思ったわ……」

「心はズキズキと痛んでるぞ……」

「死ね」

どうやらやさぐれているようだ。

原因はなんだろうか。

「……いつになく毒舌じゃないか、何でだ？」

「……何で、ですって？」

「おおぅ……」

クラリスの顔が怒りに染まった。

まさに鬼の形相。

「ベースキャンプに帰ってきたと思ったら、装備ごとボロボロで！

私がどれだけ心配したと、思っ……!」

声を震わせて顔を伏せるクラリス。

彰はしまった、と思いクラリスの肩に手を置く。

「……ごめんクラリス、心配させて悪かった。

……頼むから、泣くのをやめてくれないか……」

「怒ってんのよー！」

いきなり

「人が本気で心配してたのに、その態度！」

「い、いや……。」

なんとというか、クラリスをいじるのも久しぶりな気がするからさ。
ちよつと、やりすぎたかもしれないけど……」

「……私のことが、そんなに嫌い？」

「いや、そんなことはないけど……」

「じゃあ、好き？」

「いやそんなこともないけど」

「ここは、愛してるよクラリス……、って言って優しく抱きしめる
ところでしょうがー！」

「なんの話だよ……」

だんだん調子を取り戻して来た気がする。

二人とも、疲れを感じながらも無事に会えたことを楽しんでいる。
村での日常となんら変わらない、やりとりだ。

「全く……」。

……それにしても、生きててほっとしたわ」

クラリスは彰に近づいて呟く。

その彰はクラリスの力を借りて起き上がる。

そして頭の後ろで腕を組んで竜車の横に寄りかかる。

「無事とも言えるかどうか……」。

なにせ、本当の本当にぎりぎりだったからな」

「そつらしいわね」

クラリスも反対側にもたれる。

すでに装備は脱いでいるようだ。

「意識が朦朧とした状態で帰ってきて、竜車に乗った途端に眠りについたらんだもの」

余裕があるようには見えないわよね、とクラリスが続ける。

「あのときは本当に焦ったわよ。」

装備はボロボロ、体は傷だらけだったし」

「まあ、ちょこちょこつとな。」

攻撃してる最中は全く無防備で、イヤンクツクの爪やらが当たり放題だ」

そう、幾度もの攻防の応酬の中で彰の体には小さな傷が多く残っていた。

クラリスはそれを見てがっくりと肩を落とす。

「彰がハンターになって数週間でイヤンクックを倒すなんて……。……なんか私、ハンターとしての自信を無くしそうだわ……。……」

「つか、お前何年ハンターやってるんだ？」

「ええと、大体二、三年かな……。……」

「少なっ！」

「うえっ!?!」

「それだけかよ！
ハンターとしては初心者じゃねえか！」

「そ、そうなの？」

「お前の家の本に書いてあったわ！」

「そ、そんな……。……」

クラリスは床に手をつけて気を落とす。

「たく、疲れさせやがって。……ふあああ」

彰はおもわずあくびを漏らす。

かなり疲労を感じているようで、頻りに目を瞬かせている。

「ああ、なんかまだ眠いかも……。……」

「ここまで戻ってるってことは確実に一日は寝てたはずなのに。」

「ゆっくり休みなさい。」

「彰はすごく頑張ったもんね」

「……………ああ、そうだな……………」

「そうさせてもらおうよ……………」。

彰は体を横にして目を閉じる。

余程疲れていたのか、すぐに意識が沈んでいった。

初めてのクエストで、予想外の出来事。

今までの人生で一番過酷だったと思う。

この世界に来てまだ一ヶ月程だけれど、これからどうなるのか。それは自分にも分からない。

ハンターとして生きていくのか。

まだまだ世界を知らないことには、答えは出せない。

しかし、ひとまず体を休めよう。

次に起きたときには、ポツケ村に着いてるだろうな……………。

第十三話 雪獅子出現、つまりリベンジの時

「今日はかるーく採取クエストでもやるか」

居候中の家から出て雪が積もった地面を踏みしめる少年が一人。

それはバトルシリーズ一式に身を包んだ彰だった。

イヤンクックとの戦いの後、一週間もの間ベッドに寝たきりで休んでいた彰は、回復後様々なクエストをこなし徐々にハンターとして成長してきていた。

そして成長したのは彰だけではない。

「最近は何クエストばかりだったし、それもいいんじゃない？」

クック装備一式を纏ったクラリス。

彰と共に数々のクエストに挑戦を続け、いまいち挑戦を躊躇っていた大型モンスターの狩猟クエストにも挑んだ。

村からも頼られる存在と変わっていき、クラリスは微かに持っている暗さを発散させたようだ。

そして今はクエストを受けるため、村長のいる場所へ向かっていた。

「あれ、人だかりができてる」

クラリスが広場の方を指差して言う。

目を凝らして見ると村の人間の殆どが集まっているらしい。

「おーい、どうしたんだ？」

彰が走って近づき、呼びかける。

「ああ、アキラか。」

「いや、なんだか雪獅子の野郎がまたここらに現れたらしくてよ。」

村人の一人が二人に気付いて状況を話す。

それに二人が返した言葉は。

「やっとな……。」

「ああ、そうだな……。」

この程度の反応。

そして待っていたと言わんばかりの言葉。

「やっとな……。」

「お前ら命からがら逃げてきたんだろ!？」

村人はそれを見て慌てて二人に詰め寄った。

「何言ってるんだ。」

「リベンジする絶好のチャンスさ。」

「そうよ。負けっぱなしじゃいられないもの。」

この数ヶ月で見つけた二人の共通点。

料理が苦手、猫舌、訓練所の教官が苦手。

それに、負けず嫌い。

二人はドドブランゴに対して逃げるしかなかったことに少なからず

悔しさを感じていた。

そしてこれは、その雪辱を果たすチャンス。二人が燃えないわけが無かった。

「そうか、まあがんばれよ……」

村人も軽く引いてる。

「今度こそ、叩きのめしてやる……」

「何言ってるの彰。」

「あいつをぶつつぶすのは私よ……」

まあ、兎にも角にも。

『この狩り、絶対に勝つ!』

第十四話 ハンターの始まり、つまりクラリスとの邂逅の日

ここはポツケ村の一角にある武具屋。

主に武具の販売と生産、強化を請け負っている。

「おっさん、これ強化して欲しいんだけど……」

彰はそこに自分が持つアサシンカリングの強化を頼みに来ていた。

「おっ彰、武器の強化か？」

この間、防具を作ったばかりじゃねえか」

バトルシリーズのことだろう。

「まあいい。

……それで、武器だったか。

彰が今作れるのは、ドスバイトダガー、サンダーベイン、そしてポイズンタバルジンてどこか」

どうやら三つの選択肢があるらしい。

ドスバイトダガー、切れ味をとるならばこれにすべきだ。
無属性なのでオールマイティに使用できる。

サンダーベイン、雷属性が付加された剣。

攻撃力はドスバイトダガーにも劣らない。

ポイズンタバルジン、毒の状態異常が見込める剣。

攻撃力が選択肢の中で最も高く、切れ味も悪くない。

総合的な面で見るとポイズンタルジンが一番だろう。状態異常の属性は片手剣に合っているし、攻撃力の高さも魅力の内だ。

彰はそう考えた上で結論を出した。

「……ポイズンタルジンで」

「まあ、そうだろうな。よしっ、今作ってきてやる。

時間は……大体三時間後ってところか。それくらい経ったらまたこい」

「分かった、よろしく」

そう言っただけで家の方へ歩き出す。

今は準備期間の最中だ。

来たる決戦のための準備期間。

二人で決めたその時間は三日間。

武器を強化するもよし。

休んで体力を温存するもよし。

とにかく三日間は間を置くということだった。

「クラリスはどうしてるんだっけ……」

確か、新しく作った太刀の試し切りだった気がする。

「はあ、ついに明日か……」

そして今日が準備期間の二日目。

明日が最終日だ。

明日は大事をとって休むのと、罾などの道具の準備。
今日は武器の強化をすることに決めていた。

「…………ドドブランゴ」

彰が一番最初に出会ったモンスター。

雪原に溶け込んで見つかりにくくするために白くなった体毛。
鋭い牙と爪、強靱な肉体。

どれをとっても脅威にしかならない。

そしてその数日前、クラリスと出会った日だ。

ドスギアノスに襲われて怪我をしたというクラリスを、なんとかポツケ村まで連れてきた。

あの時クラリスに出会ってなければ、あの場所で目覚めなければ。
ハンターになっていたかも怪しいところだ。

クラリスはあの時、他人を信用できなかった。

悲しむべき過去によってだ。

今は本来のものと思われる性格に落ち着いているが、簡単に落ち着するような件でもないだろう。

いずれはその過去とも向き合うことになるかもしれない。

あの時は流れてぶちまけてくれたけど、疫病神とまで呼ばれていた
ことがすんなりと収まるはずもないだろうし。

「…………私が死んでも悲しむ人なんていない……………」

その時にクラリスが零した言葉だ。

クラリスの心からの叫びだったような気もする。

……俺はもう、クラリスの他人じゃない。

死んだら悲しむし、死なせないように守りもする。

この戦いでそれをクラリスに知って欲しかった。

もうクラリスは一人なんかじゃないってことを。

「もう、帰れないな……」

元から帰ろうとはしていなかったし、帰る方法も判らなかった。

ただ、ここまで深く関わってしまった以上帰れない。

クラリスを置いては帰れない。

「あ……」

考え事をしながら歩いているうちに家に着いてしまった。

武器が出来上がるまで後三時間、何をして暇をつぶそうか……。

やはり考え事をしながら彰は家の中に入っていく。

今の季節は秋。

雪山においては寒さがいつそう増す季節らしく、どこの家も暖炉を焚き始めている。

家も（あくまでクラリスの借家だが）最近暖炉を使い始めた。

ベッド横の本棚に向かう。

その中の革のカバーがなされた厚い書物を取り出す。

少し前から読み始めた小説で、ハンターとは何の関係も無い恋愛小説である。

この世界でミリオンセラー、つまり百万本売れた作品だということだ。

肝心な内容は、とある貴族の令嬢としない平民の青年が恋に落ちてしまった。

さあ、数々の障害を乗り越えて二人は真実の愛を掴み取れるのかというストーリーらしい。

元の世界では良くあるパターンだが、貴族というものが今まさに存在するこの世界では共感にも似た理解が得られるらしく、ミリオンセラーに至ったのではないかと思われる。

読み始めた切欠は、クラリスに勧められたから。

感動の超大作なのでぜひ読んで欲しい、と半ば無理矢理押し付けられた形だ。

いざ読んでみると、文字がわからないため感情の読み取りが難しく、クラリスに尋ねながら少しずつ読み進めている状況だ。

ふと、部屋を見回してみる。

壁に飾ってある財宝がひとつ。

宝石が所々に散りばめられたエンブレムのようなもので、高貴な印象を受ける一品だ。

クラリスの所持物で、大切なものだということだ。

クラリスは光物に興味があるような人間でもないし、どうしてかなとも思ったりしたが本当に大事らしいので深くは詮索しないようにしている。

一瞬、クラリスと物語のご令嬢が重なってしまった。

どことなく上品な雰囲気纏っているため、気になってはいる。

第一、小さな村の一村人が一人生き残ったからといって、そこまで

有名になるものであろうか。

しばらく住んでいて判ったことだが、そういう事件はこの世界に於いて特別珍しいものでもない。

新聞には、小さな記事でどこの村が壊滅しただとかが二ヶ月に一度はある。

もしかしたらクラリスは大きな街のお姫様だったりして……。

そこまで考えて自分が本を読んでいることを思い出した。

「……それはないか」

お姫様というにはお転婆すぎる。

彰はゆっくりと自分の世界に入っていた。

第十五話 一人の先客、つまり同士？（前書き）

はつきりと言いましょう。

この回からしばらく、狩り要素は殆ど無いと！

第十五話 一人の先客、つまり同士？

凄まじい勢いで吹きさらす吹雪に見舞われた今日の雪山は、二人にとって邪魔でしかなかった。

対してドドブランゴは吹雪の中だろうが鼻を利かせて位置を特定してくる。

言わば最悪のコンディションだった。

しかし、ドドブランゴも意味も無く猛吹雪の中にでてる筈は無い。従って戦闘が開始されるのは、現在二人が歩んでいる洞窟の中に他ならない。

「……本当にこっちにあるのか？」

「雪山だけなら私の方が長いよ。」

大型モンスターの寝床はこっちにあるのは知ってるんだから」

「……ま、従うけどよ」

向かっているのはドドブランゴが住処にしていると思われる大空洞だ。

俊敏性を武器とするドドブランゴには、不利かもしれないが仕方ない。

吹雪の中戦うよりは良いだろう。

と、彰が横を向いて何かに気付く。

余程驚いているのか、動きも固まってしまっている。

「……ところで、クラリス？」

「なに？」

「ちょっと聞きたいことが……」

「だから、なによ？」

「あれって、ドドブランゴじゃないか？」

「は……？」

クラリスは呆けた声で彰の方を見る。

彰は横道の方を指差している。

そこには、確かにドドブランゴが横たわっていた。

「……これ、死んでるじゃない」

「やっぱり、そうか……」

ドドブランゴの死骸は毛にじんわりと血を滲ませて、止まったままだった。

しかし、死に方が不可解と言わざるを得ない。

傷口は鮮やかに斬られた跡。

明らかにモンスター同士の争いによるものではなかった。

恐らくは、ハンターによるもの。

彰たちがクエストを受けているのなら、他のハンターが同時に同じ狩場に居るのはおかしい。

なぜなら、膨大な量の狩場の中であっても、ギルドが管理を行って

いるからである。

「参ったわね、誰かと重複したのかしら」

「でも、違う狩場で同じクエストは受けられないはずだ。

……とにかく、気をつけるのに越したことはないだろうな」

「そうね。ドドブランゴを倒すくらいなら複数だと考えていいわね」

「とにかく、辺りを周ってみよう」

「うん……」

そうして、彰たちは雪山を注意深く探索し始めた。

洞窟内、麓、山頂まで。

それから、数時間後。

「……結局、なにも見つからなかったわね」

「足跡すら無かったしな」

集中して探したが、なんの手がかりさえも見つからなかった。

彰たちは、そろそろ諦めようとしていたのだが。

「すみません、ちょっといいですか？」

「なっ!?!」

「なに!?!」

突然後ろから聞こえた声に、二人は素早く反応した。
振り向いた二人が見たのは。

「ああ、これはすみません。」

「どうやら驚かせてしまったようですね。」

185センチメートルはある彰よりほんの少しだけ小さい背丈。
ほんの少し灰色がかった白髪はクラリスよりも長い。
そして彼女が着ているもの。

「……ギルドナイト。」

「はい、ギルドナイトから派遣された者です。」

名前は明かせませんが、と続けるその女性。

ナイト、つまり騎士というにはおよそ似つかわしくない格好だった。

黒と白で構成された色調。

膝までのスカートと脚を覆ったタイツ、アームウォーマーと手袋。

腰にはエプロンで、上半身にはベスト。

肌が露出されているのは顔のみ。

「……ゴスロリかよ。」

「ゴスロリ、とは？」

「ああ、いやいや、なんでもない。」

そつえば通じない言葉もあるんだったな。

「ところで、そのギルドナイトさんが何の用でここに？」

彰はできるだけ動揺を悟られないように努めて尋ねた。
もちろん、邪な考えなどでは全くないが。

「はい、それはですね。」

クラリス・フィン様についてのことです」

「私？」

「はい」

ギルドナイトというからにはギルドの関係者なのだろうが、一体クラリスにそのギルド関係者が何の用だろうか。

「クラリス様、あなたにはミナガルデのギルド本部へ来て頂きます」

「なっ……！？」

「ど、どうして！？」

クラリスはドンドルマのギルドの所属だろ！？」

ドンドルマとミナガルデのギルドはあくまで別の組織だ。

別のギルドからの要請に従う義務などクラリスにはないはず。

「ハンターとしてではありません。」

クラリス様には、シュレイド王国滅亡及び各集落壊滅についての最重要参考人として来て頂きます」

「シュレイド王国、滅亡……?」

王国の滅亡なんてことがあったのか?
いや、それより。

「なんでクラリスがそんなことで……」

「それは、クラリス様が……」

「言わないで!」

この女が現れてから一度も言葉を発しなかったクラリスが突然大声で会話を遮った。

「……おとなしく着いて行くから。彼には言わないで頂戴……」

「……わかりました、ではこちらへ」

ギルドナイトの女性の言葉に従ってクラリスが着いて行く。

「待てよ、クラリス!俺も一緒に……」

「……心配しなくても、私はちゃんと帰ってくるから」

「……申し訳ありませんが、あなたをお連れすることはできません」

「でも……」

「大丈夫、私は何もしていないんだから。家で待ってて、ね?」

「本当になにも無いんだよな……?」

彰の問いにクラリスは小さな笑みで返して振り返った。

「……!、……」

「それじゃあ、行きましょう」

「冷静な判断、有難う御座います」

そうして二人はどこかへ行ってしまった。

シユレイド王国滅亡、各集落の壊滅。

その最重要参考人にクラリスが関わっている。

恐らく前に話していた疫病神騒動。

クラリスは控えめに話していたに違いない。

その疑いが自分に向けられていると知ったら、俺に嫌われると思っ
てあいつの言葉を遮った。

まだ、完全には信用されていないということか……。

いままで見たクラリスの笑顔、それらも全て偽りだったのだろうか。

……いや。

「……俺が、あいつを信じないでどうするんだ……」

確かにクラリスは助けを求めていた。

あの笑顔のときに。

「……あいつ、嘘が下手なんだな。
あんな目をして、心配するななんて……」

クラリスが笑った後の悲しい目。
初めて会った時と同じ目だった。

あいつだってまだ心配なんだ。
俺が本当に味方なのか。

「ミナガルデか……」

彰は密かな決意を胸に村へ帰った。
その目には激しい炎を湛えていた。

そして、翌日。

彰はポツケ村を発った。

第十六話 目的地までの中間地点、つまり都市ドンドルマ（前書き）

遅れてしまってすいませんでした。

描写に悩んで予想以上に時間がかかってしまいました。

次はもう少し早く上げますので待っていて下さい。

第十六話 目的地までの中間地点、つまり都市ドンドルマ

都市ドンドルマ。

彰とクラリスが所属するギルドの本部がある場所で、今居る大陸の東半分の狩場を管轄している街でもある。

そのドンドルマを、彰はひとまずの休憩地点として目指していた。

約五日間、竜車に揺られて彰は一人で遙か遠くのポケット村からやってきた。

雪の降る山脈を越えて、モンスターの現れる平地を越えて進んできたところだ。

遙か西に位置する、ミナガルデに辿り着く為に。

その目的地までの中間地点、彰にとっては初めての街であるドンドルマにたった今到着するところだった。

目の前には、山かと思紛うばかりの岩壁が聳えている。

しかしそれは自然のものではない。

恐らくは円形である、街の囲う外壁。

自分の身長の高倍は高いだろうという門。

入らずとも感じられる熱気。

全てに圧倒されていた。

「止まってくれ」

開いた門の前に立っている門番から話しかけられた。

街に入ろうとする他の人間も同じらしい。

彰は素直に止まっておく事にした。

「すまないが、ギルドカードを見せて貰えるかな？」

門番は彰の格好からハンターだということを察して促した。今の彰の格好は軽めのハンターシリーズで、片手剣も腰に備えている。

これは道中のモンスター対策のためだが。

「ああ、えつと……、これでいい？」

彰は懐からカードを取り出し門番に見せる。門番はそれを手に取ってすぐに彰に返す。

「旭彰くん、ようこそドンドルマへ」

門番は小さな笑みを見せて彰を通した。流れ作業の中で、この笑顔には本心が見える気がする。

「どうも」

彰もつられて笑い返す。

しかし、はっとして少し険しい顔になってから首を振った。

「これじゃ、まるっきり田舎者じゃん」

これではなめられてしまう。

何に、とは聞かないでおこう。

彰は今多少なりとも興奮しているからだ。

以外に俗物なところも持ち合わせているらしい。

彰は心の中で気合を入れてから改めて街の中に入る。
中央の大門とこの世界の文字で刻まれた大きな看板を一瞥してから
歩を進める。

そして、一歩足を踏み入れた……、その瞬間。

『寄ってらっしゃい、寄ってらっしゃい!!』

『ランチは、ぜひ当店で!!』

『そのハンターさん、ウチで武器を買って行ってよ!安くするか
ら!!』

大きな広場にあっても立ちこめているのと錯覚する熱気が彰を襲う。
村でも、前の世界でも経験したことの無い活気だった。
どちらを見ても商売人や店で賑わっていて、客を呼び込もうと大声
を張り上げている。

「……ふつーに凄え」

彰はかつて無いの驚愕に少しの間ぼーっとしてしまった。

自分の目的を思い出して急に歩き出したのも、その数十秒後である。

「こんなことしてる場合じゃなかった。

準備をしてすぐに出発しなきゃな」

そもそもの目的はクラリスを追いかけること。

四方八方から発せられる熱気で思考能力が低くなっていたようだ。
再び、彰は自分に気合を入れた。

「……よし！行くか！」

そうして歩き始めた彰。

もともと水や食料を求めて立ち寄っただけ。必要なものを買集めたらすぐに出発する予定。

大通りに沿って左右をきよきよと見回しながら進む。見るもの全てが新鮮で、興味は津々だった。

「……はっ！危ねえ、食べ物の魅力に惑わされるところだった」

そんなこんなで。

彰は意気揚々と進んでゆくが、どこになにかがあるかを把握しているわけではない。

取り敢えず周ってみなければ仕方がないのだが、勝手知ったる街でもない。

そんな彰が迷い人となってしまふのには、そろそろ時間はかからなかった。

「なんか、どんどん暗くなってきたような……」

不安に駆られて現状を口にしてしまう。

明らかに大通りとは雰囲気が変わっている。

分かり易く言うのなら、気味が悪い。

つい先ほどまで否が心でも聞こえてきた喧騒も、離れているようだ。自分以外に視界の範囲には人間もいないらしい。

しかし、どこかに居ることは判断できる。

時々、どこかから争うような怒鳴り声が微かに届くからであるのだが。

恐らくは街の治安が行き届いていない場所（といってもドンドルマに治安維持システム自体が存在するのも知らないが）の入り口に
あたる路地なのかもしれない。

どの街だっけそういう面は持っているものだ。

これだけ大きい都市ならば、それも少なからずといった所だろうか。

「ちょっと、奥に行ってみようかな……」

ふと、好奇心が首をもたげる。

この世界で初めて訪れた都市に居て、注意力が鈍っているのかもしれない。

彰は、そういう危機に出会ったことの無いのが当たり前だ。

危険なこととは無縁な世界で十数年過ごしていて、判るうはずも無い。

だから、今訪れる危機にも気付かなかった。

「おい、坊主」

「はっ……!?!?」

「ここらじゃ見ねえ顔だな……。こつちの人間じゃあねえな……?」

いつの間はこの空間に存在していたのだろうか。

見るからに真っ当ではない見てくれの男が後ろに立っていた。

どうやらついさっきまで火薬を扱っていたのか、彰は鼻につくような匂いを感じた。

「……あんたは?」

「名前は言えねえな、簡単には」

自分の名前は立派な情報だと言外に仄めかしているようだ。

彰は、このまま此処に留まっけていても良いことはないと察し振り返って男の横を通り抜けようとした。

「……………」

そのまま男の横を通り過ぎる。

男はそれを止めるでもなく、ただ彰の姿が見えなくなるまでじっと睨んでいた。

数分後、彰は通ってきた道を迷うことなく辿ってきた。

元々一本道だったため、数分で元の通りに戻ってくることができた。

「……………あれは、裏通りってところか……………」

通りの名称など知らないが、印象一つで簡単に名前をつけてしまった。

明るい方が表通り、さっきのは裏通り。

安易に行き着く名前だが、これが一番本質を表せているような気がする。

先ほどの男も、恐らくは裏通りの住人。

ドンドルマの裏世界の門番のような存在なのかもしれない。

「それにしても、参ったな。

広すぎてどこに何があるのかも判らないし……………」

そもそも、ミナガルデまで保つように荷物を用意すればいいのかと思つかもしれない。

しかし、距離が半端な長さではない。

このドンドルマまでが五日間。

ミナガルデまではここからさらに五日間。

合計十日間の日数がかかる。

そして、十日間保存できる食料は結構高い。

それなら途中のドンドルマで食料を買ったほうが安上がりだということ計算だった。

彰がここまでの方向音痴だと本人も知らなかったが。

結局、彰はそうして困ったまましばらく立ち止まっていた。

だが、そんな彰に人影が一つ近づいていた。

「そのこのハンターの方、お困りですか？」

全身ローブで、頭もフードで隠された女性。
女性というのも声でしか判別できない。

「え、ああ。この街は初めてで、色々書きたいんだけど店とか知らないんだ」

「成る程、それならば私が案内しましょうか？」

「……なんで俺なんかを？」

「ただの親切です」

彰はこの女性をいまいち信じられないでいた。全身を隠しているのは見た限りこの女性だけだし、雰囲気は怪しさを帯びている。

だが、疑うだけでも始まらない。

「じゃあ、是非」

「わかりました。

見たところ旅路の途中、水や食料を売っている店に案内しましょう」

そう言つて、女性は歩き出した。

それに着いていく彰、だが内心は疑問に満ち溢れていた。

なぜ旅の途中だと判つたのか。

こんな無愛想な人間が自ら親切を申し出てくるだろうか。不思議なことばかりで、彰は混乱していた。

「こつちです」

しばらく大通りを進んだ後、わき道に逸れた。

裏通りほどではないが、商売人などは毛ほどもいない。

「本当にこつちに店が？」

「はい、安く物が手に入る店は少し中のほうにあります」

街のことを何も知らない彰は何も言い返せず、黙って着いていった。

そして数分後、女性が突然立ち止まった。

「……なにも、ないんだけど？」

「……………」

彰の言葉通り、かなり入り組んだ道を入っていったが、店はおろか人の気配も無い。

これではまるで、裏通りのようだ。

「おい……………」

「アサヒアキラ様」

「は……………」

彰のフルネームをなぜ知っているのだろうか。

彰は疑問をそのまま口にした。

「なんで俺の名前を知ってんだ？」

「あなたを、ここで足止めするのが私の仕事です」

「足止め……………」

「はい」

「一体俺がどこに向かっているの？」

思っているのか。

彰は嫌な予感を感じながらも尋ねた。

「都市、ミナガルデ」

「なるほど、ギルドの人間か」

「……お忘れですか、私の声を」

女性は急に声色を変えた。

少しくぐもった低い声から、透き通るような高い声に。
彰はその声に聞き覚えがあった。

「……あのときの、ギルドナイト」

「はい、スピカと申します」

「いいのか、名前を言っても？」

「問題ありません。」

あなたはここで、消えますから」

「……ギルドナイトは、そういう連中の集まりってことか」

「暗殺は私の主な仕事ではありません。」

「今が、初めての暗殺の仕事ですから」

「なるほど、それで十分ってことか」

「……………」

ギルドナイトのスピカは無言で構えをとった。

もう喋るつもりは無いらしい。

「やるしかないか……」

それを受けて彰も両手を握って胸の前で構えた。

相手の実力は判らないが、黙ってやられるわけにはいかない。
モンスターではなく、人間との戦いが始まるうとしていた。

第十七話 ギルドナイトの実力発揮、つまり彰に勝ち目は無し？（前書き）

一回書き上げてから全部消えてしまいました。

最近、文字を入力するときのバーがあっちこっちに移るんですよ。その状態で BackSpace を押すと、ページが戻るといった恐ろしい現象が……。

第十七話 ギルドナイトの実力発揮、つまり彰に勝ち目は無し？

彰は今、ほぼ全身をローブで包んだ女性と対峙していた。

限りなく白に近い灰色の腰まで届く長髪。

名前はスピカ、ギルドナイトの一員らしい。

スピカとは、彰の居た世界では別名真珠星。

おとめ座の 星で、美しい一等星である。

恐らく偶然の一致だろうが、少なからず親近感を覚えてしまう。

名前の通り美しい女性は、自身のローブに手をかけた。

「これ、邪魔ですね」

そう言い放つと、一気にローブを剥ぎ取って横に投げ捨ててしまった。

そうして現れたのは、あのと時と同じモノトーンで構成された装飾の多い服装。

クラリスを連れていった時と同じだ。

「ところで、クラリスはどうなるんだ？

これで最後かもしれないんだ、教えてくれ」

「お断りします、不用意に傷つけることはしたくありません」

「……なるほどな、よく理解できたよ」

彰は拳を固めて、ブルブルと震わせている。

「一秒でも早くお前を倒して、クラリスの下に行かなきゃいけないってな！」

最初に動いたのは彰だった。

叫びながらスピカに突撃する。

といつても、考え無しの力任せではない。

相手の実力も、戦い方も不明。

ならば初撃は探りを入れようと考えた。

彰はある程度近づいてからパンチを繰り出した。

顔を狙った真つ直ぐのパンチ。

様子見のつもりで放った一発。

それに対してスピカがとった行動は。

「……ふっ！」

「がっ……！」

心臓に一突き。

「な……！？」

「様子見などという考え、殺し合いの中ではどれほど愚かなことか。いかに殺しをしたことが無いといつても、あなたを殺すことなど造作も無い」

彰は静かに地面に倒れ臥した。

対照的にスピカは悠然と立っている。

戦闘開始僅か数秒で決着がついてしまった。

スピカがとつた行動とは素手での突きではない。
袖に仕込んだナイフでの一撃だった。

実はスピカの戦闘能力はギルドナイトの中でも折り紙つきなのだが、
彰にはそのようなことを知る由も無い。

スピカは目の前の男を殺したことを確信して振り返る。

「……………くっ」

僅かに見えた憂いの表情に自分でも気付かずに
だが。

「……………随分悲しそうな顔だな、スピカ」

「な……………、なぜ!？」

彰は膝をつきながらも確かに立ち上がるうとしていた。
胸から血を流しながらも、それでも目は死んでいない。

「心臓ギリギリだった。

あと少し右に刺さっていたら、死んでたよ」

「それでも……………、そこまで血を流しているなら、動くのも辛いはず。
何を理由に、そんな……………」

「あいつと狩りに行くと、助けなきゃいけないときがどうしても出
てくる」

スピカの言葉を遮って、彰は語りだす。

「そんなことを繰り返す内に自然と体が動くようになってきた。
あいつを助けなくちゃ、って」

砂漠でも、沼地でも、どこだって助けてきた。

「だから、今だって半分勝手に体が動いてんだ。
今は息をするのだって、苦しいのにな……」

そして何より。

「……あいつは確かに助けを求めてきた」

「そんな素振り一度も……」

「目を見れば一発で分かるぞ」

「……………」

「嘔吐きやがって、水臭いだろうがよ」

「……………やめてください」

「あいつは今囚われの身なんだろう……」

「やめてください」

「それなら、俺から行くしかないだろうがよ！」

「やめてくださいっ！……」

スピカが始めて大きい声を上げた。

「……もう聞きたくありません。

あなたには一生黙っていてもらいます」

「……………」

彰は何も言わない。

「なぜ何も言わないんですか。

私はあなたを殺すといってるんですよ？

それとも怖くて声もでないんですか」

「涙、拭けよ」

「え……………」

スピカは言われて自分の顔を袖で拭いた。

すると、袖は濡れていて、そうしてからスピカは自分が泣いていることに気付いた。

「やっと本気の言葉で喋ってくれたな。

何故俺を殺そうとするのかは判らないが、辛いならやめればいい」

「……………あなたに何が分かるんですか」

「言わなきゃ何も分からないさ」

「……………私にだって、理由があります」

「ああ……」

「私だって好き好んであなたを殺したいわけじゃない。でも、ミナガルデギルド幹部の一人に反対すれば私の故郷を滅ぼされる……！」

「どうするしかないんです……！」

「……………」

彰は思わず齒軋りをしてしまう。

今回の事件の黒幕が判ったからだろうか。

「どうしようもないんです……………」

「じゃあ、俺を殺すのか？」

「そ、それは……………」

スピカは身を小さくする。

「じゃあ、ここを通してくれるのか？」

「ムリです……………」

「それなら戦うしかないよな」

「……………戦えば、死ぬのはあなたですよ」

「俺は死なないし、負けない」

「そんなこと……」

「……俺はクラリスを助け出す。

それで、その幹部をぶつ飛ばす！」

「なにを……!?!」

「……絶対にお前の故郷も助ける。

だから、ここを通してくれないか」

「う、嘘よ……」

「信じてくれないか……?」

「……な、なんで……」

スピカは地面に膝をついて、顔を俯かせる。

「私はあなたを殺そうとしたのよ？」

なのに、信じてくれたなんて……」

「おかしいか？」

「……」

スピカはひとつ頷いた。

彰は一步だけ近付く。

スピカは震えているらしい。

あの時と同じだ。

クラリスに始めて会った時。
あいつも近付くと、こつやって体を震わせていた。
ならば、同じように。

「あ……………」

抱き締めた。

「約束は絶対に守る。
だから俺に任せて欲しい」

「約束…………？」

「お前の故郷を助ける」

「…………。うう…………、く…………」

クラリスだけじゃない。
苦しんでいる人間は、クラリスだけじゃないんだ。

スピカは声を抑えて泣きながら、何度も頷いていた。

もう二つ、目的ができた。

スピカの故郷を守ること。
ギルドの幹部をぶん殴ること。

「…………あ、やばい」

あと一つ。

「もう、限界……」

今すぐ病院に行くこと。

第十八話 人助けも商売なんでね、つまり料金一千ゼニだ

「……………ん」

「ここは、どこだろうか？」

倒れた後、ここに連れてこられたらしい。

あの時は焦って病院って言ったけど、この世界に病院という名称の施設は存在しない。

医療施設だとは一言も言っていなかった。

……………まあ、あの状況ならそれしかないだろうが。

彰は自分がベッドに寝ていることにまず気付いた。

周りを見ると普通の民家の内観にしか思えない。

しかし彰は鼻を刺すような匂いを嗅ぎ取った。

部屋の中にある机の上にあるもの。

実験器具に見えるが、その中に入っている無色の液体から発せられる匂いの可能性が高い。

部屋には、スピカは見当たらない。

彰は立ち上がった。一旦部屋から出て人間を探そうとした、が。

「いつ……………!？」

脇腹が突然痛み出した。

恐らく、スピカに刺された場所だろう。

刺された事をすっかり忘れていた。

傷口を触ると、僅かに血が滲んでいるようだ。

しかも、立っていると頭がクラクラする。
大人しく座っていた方が良さそうだ。

「ああ、なるべくタイムロスはとりたくなかった……」

「何の話だ？」

「うわっ!？」

突然誰かから声をかけられた。

ドアの方向を見てみると、そこには見覚えの無い男が立っていた。
彰と同じくらいの背で、服装は清潔だがくすんだ灰色の毛髪はボサボサだ。

眼鏡をかけて、眼が眠たそうに閉じかけている。

「ようやく起きたか、アサヒアキラくん？」

「……どうして知ってたんだ？」

「そりゃあ、君を連れてきたお嬢さんからさ」

「……スピカか」

そう、彰はスピカに運ばれてこの場所に来ていたのだ。

「というか、ここは何なんだ？」

「診療所、といったところかな。」

ただし、ドンドルマの暗闇通りに位置しているが

「暗闇通り？ああ、裏の通りのことか」

「そうだね、それで間違いないと思うよ」

スピカは裏の世界にも詳しいのだろうか。
と、そこで彰は思い出した。

「そうだ、スピカはどこに！？」

「彼女なら、隣の部屋で眠ってるけど？」

「ああ、なんだ……。良かった」

「恋人、って訳でもなさそうだね。
なにせ、ギルドナイトの様だし」

「ああ、違うよ。」

……ところで、あんたが治療してくれたんだろ？
何で返せば良いか、金なら多少の持ち合わせは………」

「果たして多少で済むかどうか。」

「料金はしめて一千ゼニーというところだ」

「い、一千ゼニー！？」

そんな金を持ってこられるはずが無い。
今彰は、五百ゼニーしか持っていなかった。

「結構な重症だったので、高価な麻酔薬を使わせてもらった」

「まあ、確かに深く刺さってたけど……。
今、その半分しか持ち合わせが無いんだよ」

「それは困ったね、物で払ってもらっしかなくなる」

「……ものつて？」

男は下腹部の辺りを指して言う。

「例えば、これとか」

「……マジかよ」

それは非常に困る要求だった。

まず死にたくないし、クラリスを助けるまでは死ねない。

「……そうだ、スピカが持つてるかも！」

「彼女君と同じことを言っていたよ」

「マジかよ……」

「……とは言っても、不足分としては臓器は重すぎる。

君が所有している、金品やその望みがあるものを差し出してくれれば良しとしようじゃないか」

「……これは？」

彰は自分が座っているベッドの横に置いてあった片手剣を手にとつて聞いた。

「少し足りないね、良くても三百ゼニーだろう」

そもそも、ある程度の金は残しておかないといけない。

何故なら、この街に寄った目的の根本は、消耗品の買い足しだったからだ。

お金が無くなったということになれば、五日間を僅かな食料や水で過ごさなければならぬ。

そうなのは本末転倒だ。

しかし、彰は閃いた。

「……あ！これなら！」

「……なるほど、確かにこれだけで一千ゼニーの条件を満たしている。

いいだろう、これで手を打とうじゃないか」

彰は持っている片手剣で指を切つて男に突き出す。

その指からは、血がゆっくり滴っている。

彰が差し出したのは、自らの血液だった。

「本当にいいのかい？命に別状が無いのは保証するが、それなりの量は採らせてもらうよ？」

「一番時間がかからないのはこの方法だろ。」

俺はいいって言ってるんだ、早く一千ゼニー分採ってくれ」

「……………」

まあ、僕は構わないが……………」

彰は裾を捲くつて男の方に差し出した。
男も器具を取り出し、慣れた手つきで準備を始めた。

「……それで、ドアから見ている彼女は気にしなくても？」

「は？」

彰は男の影に隠れて見えなかったドアが見えるように体を倒した。
半開きのドアからは、スピカがちょこんと顔を覗かせていた。

「……何やってるんだ」

「あ……」

覗いているのを見つかつて、スピカはゆっくり部屋に入ってきた。

「……別に、何もありません」

「あつ、そ」

「……」

彰はスピカとの会話を打ち切ると、採血を急かした。
準備はもう終わっていたようで、男は注射器を彰の左腕に刺して徐々に血を抜いていく。

「な、何を！？」

「何って、支払いだけど……」

「そう、一千ゼニーを血液でのお支払いだ」

「血液!？」

スピカは信じられない、という顔で叫んだ。

「何だよ、そんなに驚いて……」

「あなたはただでさえ今血液が少ないのに、そんな量を探ったら死んでしまいます!」

「あ、そうだった……」

「あ、そうだったね……」

「二人とも!？」

スピカはまさに顔面蒼白といった風に血の気を無くす、彰は血を無くす。

「まあ、今回は初回に限りの割引ということだ。」

「この程度でやめておこうじゃないか、はははは」

「……………」

彰の腕から注射器が抜かれるが、彰は反応をしない。それどころかぐったりしているようだ。

「ち、血をくれ……」

「アキラさん!？」

「あ、まずい……」

彰はベッドにはたりと倒れてしまう。

スピカと医者の方はそれぞれの対応をする。

慌しくも、時間は過ぎて行く。

果たして彰は、クラリスを助けられるのか。

ちなみに、彰はあのと無事助かった。

第十九話 知った真実、つまりクラリスは……（前書き）

やっと書けた……

第十九話 知った真実、つまりクラリスは……

「私も行きます」

「え？」

彰とクラリスの二人は、あの後すぐに診療所を出た。

彰は多少ふらついているが、今は急いでいるので気にしていない。

現在は、予定通り商店街で買い物をしていた。

沢山の店が並ぶ中、スピカは一つ隣の店に居た。

「ですから、私もミナガルデに行くと言ってるんです」

「いやいや、そうじゃなくて」

買い物の最中、スピカは突然独り言のように喋りだしたのだった。あまりにもいきなりだったもので、彰は言葉を出せないでいるが。

「……え？着いて来るの？」

「はい」

彰の困惑にも動じず、それが何か、と言わんばかりの顔だ。

「故郷が危ういというのに、じっとしてるわけにもいきません」

「まあ、それはそうだろうけど……」

「それに……」

「ん？」

「あそこまで情熱的に告白をされては仕方ありません」

「ぶっ!？」

彰は吹き出してしまった。

咽たのか、胸を叩いて咳をしている。

「な、なにを……?」

「絶対に守る、と言ったでしょう?」

「……約束を、って言わなかったか?」

「そうでしたか?」

スピカは無表情だが、あの争いの後から多少表情を見せてくれるようになった。

といっても僅か二日間ほどの付き合いだが。

「……でも、もちろんスピカのことを守るよ」

「……………」

彰がふざけて気障な台詞を吐く。

するとスピカは何も言わずに背を向けてしまった。

「おい？」

彰はスピカに近付いてその顔を見ようとする。
だが、スピカは頑なに見せようとしない。

「何も言われないと恥ずかしいだろ、何か言ってくれよ」

そう言っつて彰はスピカの顔を無理矢理自分に向けた。

「……………あう……………」

「……………お前が恥ずかしがるなよ……………」

スピカの顔は真っ赤に染まっていた。

そういう言葉に慣れていないのか、それともかなり初心なのか。
どちらにしても、スピカがここまで大きく表情を変化させるを見た
のは初めてだった。

「だ、だって……………」

「お前、時々感情が昂ぶると素の言葉遣いに戻るのな」

「な、なにをバカな！」

「凶星じゃねえか」

「くっ！」

第一印象とかけ離れたスピカの一面を見ていた彰だったが、ふと思
い出した。

「そついや、着いて来たいって本気なのか？」

「……そうです」

スピカは落ち着いて言葉遣いを直して問いに答えた。

「故郷のためにも、ミナガルデのギルド幹部は倒さなければいけませんし」

「……まあ、目的は同じか」

「え？」

「俺の目的もその幹部なのさ」

彰は腕を組んで、スピカの方に向き直る。

「そいつは今回の事件の黒幕を、知ってるはずなんだ」

「……ほかに犯人が居るといことですか？そう思う理由は？」

「理由っていう程のものでもないが……」。

スピカを故郷を盾にとつて脅すくらいだから、そいつは相当失敗できない状況に置かれてる。

でも、猶予は十分にあるはずだ。クラリスの関わった事件に關係があるとしても、その騒ぎはもう収まっているし……」

「つまり？」

「つまり、クラリスに怨恨がある人物が今回の黒幕だ」

「……でも、それが誰か分かるんですか？」

「まさか、分かるわけ無いだろ」

彰はオーバーに肩を竦める動作をしておどける。

しかしスピカはそれが気に入らないのか、目つきが少し鋭くなった。

「じゃあ、どうやって……」

「まず一つ、俺の推測が正しければそいつはかなり地位が高い。

ギルドの幹部を従わせるほどだから、相当なものだろうっさ……」

「それは理解できます」

「次に、王族の関係者の可能性がとても高い」

「……それは……」

「シュレイド王国の滅亡。」

その事件の最重要人物に、クラリスは位置している。……違うか
「？」

「……その通りです。」

クラリス・フィーンはシュレイド王国滅亡の、ある意味で象徴と
されています。なぜなら……」

「……シュレイド王族のただ一人の生き残りだから」

「……………」

「これは有名な情報らしいな、丁寧にも写真付きで見つけたよ」

「……はい、少なくともこの大陸の人間は知っているでしょう。」

そして、クラリス・フィンという名も偽名と思われる」

「ああ、そうだろうな。」

クラリスの本当の名は……………」

彰は一つ、息を吸う。

「エルトランド・フィズ・シュレイド」

シュレイドの名を冠する本名。

クラリスがシュレイドの王族であることを示している。

その名を口にした瞬間、辺りの空気が重くなったように感じた。スピカは、顔を少し俯かせている。彰とは対照的に。

「俺は、エルトランドを……………」

顔を上げたまま彰は呟く。

その途中で、なぜか止まってしまった。

「いや、クラリスを……………、助ける」

「……………見込みはあるのですか」

「……………」

答えられない。

見込みなんて、あるはずもない。

「でも……………」

「え？」

「それでも、助けなきゃいけない…………！」

助けを求められたから。

言葉には出さなくても、目が怯えていた。

「取り敢えず、その幹部の所に行くぞ」

「……………はい」

「……………クラリスと、スピカの故郷のためにも」

「……………は、はい……………！」

こうして二人は、ドンドルマを旅立った。
未だ見えない、ミナガルデに向けて。

第二十話 遂に目的の地、つまりミナガルデへ

「只今、ギルドナイトのスピカを向かわせておりますので……」

煉瓦で囲まれた灰暗い一室で、会合は行われていた。
応接用の椅子に座った二人の人物。

「ほう、あの女か……」。

確かギルドナイトの中でも一、二を争う腕利きだとか」

三十代後半といった所の男性が一人。
顔に皺が深く刻まれた老人の男性が一人。

「はい、その通りです」

「ならば、安心して良いのだろうか？」

「はい、勿論で御座います……」

老人は、目の前のテーブルに置かれたコップを手に取り回す。

「例の報道の準備は、もう済んでいるのか」

「はい、もう明日にでも可能です。

準備致しましょうか、明日に合わせて」

「……そうだな、それで良い」

「承知致しました……」

「この計画が成し遂げられたその時は、貴様の昇格を図るつもりではないか……」

「有難う御座います……、是非にでも……」

「……………ふん」

そして老人はコップを傾けて、ゆっくりと口にする。

「は、不味い酒だ……」

「も、申し訳御座いません。

すぐにお取替えを……、おい、誰か！」

「もう良い。それより明日のこと、頼んだぞ」

「は、はい。必ずや、成功させて見せます」

「……………うむ」

そう言つて、老人は部屋から出て行く。

しっかりとした足つきで、規則正しく足音を立てて行った。

残された男性の下へ、一人青年が寄ってくる。

この場所は酒場でないが、呼べば人が来る。

「何か御用でしょうか？」

「なんでもないわ！」

今度来るときは、このような不味い酒は出すな！」

「は、申し訳御座いません」

そして青年は元来た道を行き、闇に紛れて消えてしまう。

「相も変わらず、恨んでいるとは……」

そして部屋の中に一人となった男性は、吐き捨てるよう呟く。

「……………」

何かを思い出すように目を閉じる。

七年前の、事件のことを。

「シユレイドの……、黒龍の呪いなのかもしれんな……」

そう言い残して、男は席を立つ。

そして、先程の老人とは反対の道に行ってしまった。

第二十話 遂に目的の地、つまりミナガルデへ

「今日の新聞、見たか？」

「ああ、見た。ありや本当か？」

「でも、確かに面影あるわよ……」

ここは大都市ミナガルデ。

普段から賑わっているこの街だが、今日は余計にざわついている。原因は、一つの情報紙面だった。

『シュレイドの姫君、滅亡の首謀者か！？』

という見出しで書かれた紙面。

そこには、次のようなことが書かれていた。

『シュレイド王国の第一子であるエルトランド・フィズ・シュレイドが未明からミナガルデギルドの手によって捕縛されていることが今日、ギルド幹部のバルゴ・ローランド氏から発表された』

『その理由は、七年前に起こったシュレイド王国の滅亡、及び幾つかの村や集落の壊滅を謀ったとされることで国際裁判院から容疑をかけられたというものです』

『エルトランド容疑者は、すぐにでも裁判にかけられるとのこと。どうやら、決定的な証拠が幾つか見つかっているようで、有罪が濃厚』

『そうなれば、死刑は免れないでしょう』

ということが書かれた文章。

今日の朝に発行された紙面に大々的に掲載されていた。

さらに、一つの写真が載せられていた。

クラリスの幼い頃の写真。

七年前で、当時九歳の正装の写真である。

それらが原因で、今ミナガルデには様々な意見が飛び交っていた。

本当に本人なのか。

いままでどこに居たのか。

どんな刑が執行されるのか、など。

だがその中に於いて一切語られない内容が一つ。

どうやって滅亡を為したのか、その方法を。

なぜなら、解りきっているからだ。

有名な話、シュレイドに伝わる秘宝。

招来の角笛。

その単語を聞いた者は怖気づいて耳を塞いでしまう。

伝説の龍の角で作られたというその角笛は、恐ろしい能力を持っている。

名前の通り、招来するのだ。

その角の主と同類、黒龍ミラボレアスを。

それ故、誰も口には出さない。
それが屈強なハンターであつても。

街は今、エルトランドの話題で沸いていた。

場面は変わつてギルド本部。

監獄の一室に、クラリスは居た。

「……………」

言葉を一切発せず、ただ蹲つて佇んでいた。

「また食べてないのか」

そこに監視員がやつて来る。

どうやら、食事の食器を片付けに来たらしい。

「……………」

「……………少しは食べた方が良くんじゃないのか？」

監視員は、明らかに衰弱しているクラリスを心配して話しかける。

シュレイドの件を信じていない者も、少しはいよつというもの。

無実の罪だとすれば、あまりにもひどい状態だからか一応気にかける人間もいるらしい。

しかし、それにも一切反応を示さないクラリス。

監視員は諦めて食事を片付けて去っていった。

「……………」

何を待っているのか、何を恐れているのか。
クラリスはただ、虚空を見つめていた。

なにも無いまま数時間後、また一人クラリスを訪れてきた。

「おい、出る」

乱雑な口調が目立つ男性で、どうやら監視員の一人のようだ。
不潔な印象を受けるが、恐らく間違っていないだろう。

「……………」

「早く出るつつってんだ！」

クラリスは怒鳴られてからようやくのろろと動き出した。
監視員は足を揺らして、落ち着かない。

「こっちに来い」

そう言つて監視員の男は奥へ歩いていく。
クラリスは目の焦点が合っていないが、手錠を引かれて強引に連れられる。

そうしてしばらく歩いた後、頑丈そうな鉄の扉が口を開けて待っていた。

「ここに入れ」

クラリスは指示しても動かないので男が無理矢理押し込む。

中に入ると、そこには数人の監視員がたむろっていた。どれも、地べたに座ったりして柄は良くないように見える。

「さて」

そういつてクラリスを連れてきた男が扉を閉める。

「お前、一国の姫様なんだってなあ？」

その監視員がクラリスの顎を上げて、自分の顔を見させて話す。部屋に居た男達は、下卑た笑い声を発している。

「それが数日後には死刑ないで、もったいないと思わねえか？」

「ひひひ、確かに」

「そりゃ、正論だなあ」

徐々にクラリスを取り囲む形になりながら、男達は話に加わってくる。

「そこでだ、死ぬ前に一口だけ！

……味わっておくのも、いいと思っつてよ？」

「そりゃあ、いいー！」

「俺にも回つてくんのか？」

自分の順番を気にして、問う男がひとり。

それを聞いて、主犯格の男はクラリスを睨みつける。

「まあ、元々壊れてるようなもんだ。
別に大丈夫だろ、じゃあ俺からな」

「ずりいぞ！」

「俺だって、溜まってんだ！」

「俺が考えたんだから、俺が最初だ。文句ねえな？」

そう言うと、皆黙った。

そして急かすような視線で、二人を見てくる。

「じゃあ、早速……」

そして男がクラリスの服に手をかける。

そこまでされても、クラリスは反応しない。

そして上着のボタンが外れるといったその時。

「待てよ」

男達の中の一人が声をあげた。

「……ああ？」

「俺の両親は、そいつのせいで殺されたんだ。シュレイドの事件で」

その男は、比較的若いようだ。

身なりも一番清潔で、帽子を深くかぶっている。

悲劇の原因に対して、復讐してやりたいというニュアンスを込めて
言い出した。

「だから、俺に最初にやらせてくれないか？」

「……そいつはいいや。」

おい、そいつに譲ってやれよ！」

「姫様も、お前よりは良いだろうよ！」

そしてクラリスと中心の男に近付いていく。

「……ちっ、まあいいだろう。」

そのかわり早く済ませろよ、童貞野郎」

「ありがとう」

そして青年に譲った男も離れて、青年もケラリスに手を伸ばす。

「なあ姫様よ。」

俺のことが判るか」

「……………」

青年がクラリスに話しかけるが、クラリスは反応しない。

「まあ判るわけないか、その様子じゃ。」

待ってな、今思い出させてやる……………」

そう言いながらクラリスの頭に手を乗せる。

「……………え」

それを受けてクラリスが僅かに反応する。

青年は頭から手を離して自分の帽子に手をかける。

「おい、何やってるんだ。」

早くやっちまえよ、親の敵だろ」

「……………ところでよ、あんたさっき俺のことを童貞野郎だったか？」

「それが何だよ」

「余計なお世話だ、このクズ野郎が！」

「な、がつ！」

そして帽子を投げ捨てて、クラリスを連れてきたその男を殴り飛ばした。

「あ……………」

クラリスは、その青年を見て死んだようだった目に光を取り戻す。

「な、何を……………！」

「手前、監視員じゃねえな!？」

「ああ、その通り」

本当の監視員の男達は、青年を睨みつける。
だが、青年は顔に笑みを浮かべている。

「何が、可笑しいんだ！」

「お前らを見て笑ってるわけじゃねえ。

ただ、長旅の目的が目の前にいるもんで、思わずな」

「何言ってるんだ！」

「死ねっ！」

暴言と共に、男達が殴りかかってくる。

それを鮮やかにかわす青年。

「うがつ！？」

「ぐあっ！」

そして一発ずつ蹴りを入れた。

「よう、クラリス。

しばらく見えない間に痩せたんじゃないか？」

「……ア、キラ……？」

クラリスが目を向ける先に居る青年は、クラリスを起こす。
そして、扉を開けてクラリスの手をとった。

「助けに来たぜ、クラリス」

青年は、黒目黒髪の少年。
異世界人の旭彰、その人だ。

第二十一話 信頼、つまり三人の絆として

「行くぞ、クラリス！」

「え……、うわ！」

薄暗い監獄の中、彰はクラリスの手を取り走り出す。

クラリスは突然の出来事に驚いて、目を白黒させていたが、二つ程の扉を開けてからようやくと理性を取り戻したようだ。クラリス彰の顔をしっかりと見て、尋ねる。

「な、なんで。なんでアキラがここに……？」

「後で話す！」

クラリスは当然の疑問を口にするが、彰は無言を言わず手を引いて走り続ける。

そうして、およそ十分程度走っただろうか。

彰は疲れていないが、クラリスが息を大きく切らせていたので一旦止まった。

「はあ、はあ……。」

「ア、アキラ……、どうしてこんなところに？」

「時間が無いから素直に言うが、お前を助けに来た」

「普段でも素直に言ってよ!？」

彰は周囲を確認しながら答えた。
クラリスはその言葉に驚いて大声で返した。

「まあ、とにかくここを出るぞ。
仲間が裏口で待ってるからな」

「仲間、って誰？」

「あいつだよ、雪山であつたギルドナイト」

「あの人が!？」

「どうして、ギルドナイトがアキラの仲間に!？」

「まあ、色々あつたのさ。」

「……よし、誰も居ないな、行くぞ！」

「ちょ、ちょっと!！」

彰はクラリスが回復したことで、見た限り人が居ないことを確認して走り出した。

クラリスも、急いでそれについて行く。

そしてさらに十分ほど走って、二人は石造の本部の建物の裏口に着いた。

念を入れて、ドアを少し開けて誰も居ないことを確かめて外に出る。

「……スピカ、居るか！」

「……います」

スピカは気絶させた番兵のそばにずっと見張りとして立っていたよ
うだ。

「お久しぶりです、クラリス様。」

この度の件、あなたを傷つけてしまい、真に申し訳御座いません
……」

「あ、あの……!!」

「改めて紹介し合おう。」

クラリス、こっちはスピカって名前だ」

「あ、その、よろしくお願いします」

クラリスは軽く頭を下げ、挨拶をする。

「それでこいつは知っての通りクラリス。」

……じゃなくて、エルトランドが本名か」

「あ……」

クラリスは、彰の口から自分の本名が述べられて俯く。

「……アキラさん、少し不躰ですよ」

「なんでだよ。」

自分の本名が、何か恥ずかしいか？」

スピカが彰の傲岸不遜な態度を指摘してくる。

だが彰は、何処吹く風という反応をした。

「そういうことじゃなくてね。」

私は、アキラを騙してて……」

「何だ、自覚はあるのか」

彰はまたも不謹慎な態度を取る。

「アキラさん！」

「……俺は謝って欲しいわけじゃない」

「……ごめんなさい」

クラリスは顔を俯かせたまま、小さな声で謝る。

彰はそんなクラリスに歩み寄る。

始めて会った時のように。

「……クラリス」

「う……！」

「何回抱き締めれば、お前は分かるのか……。」

それまで、俺は何度も慰めなくちゃいけないのか？」

「アキラ……」

彰は泣きそうな顔のクラリスが俯いて立っている場所の、一歩手前で止まった。

「でも、お前はそれでいいのか？」

「！」

「いつアキラに失望されるだろう。」

「いつアキラは知ってしまうだろう。」

「そうやって、怯えて日々を過ごし続けるのか？」

「……………」

凶星を突かれたからか、クラリスは黙っている。

「いいか、クラリス。」

「そんなゴミみたいな感情は、捨てちまえ」

「な……………！？」

「なにを……………？」

彰は親指を立てて下に向ける。

クラリスとスピカは、二人して目を見開かせて驚いている。

彰は喋り続けるのをやめない。

「いい加減分かれよ、クラリス」

「……………何を？」

彰は少し、息を吸う。

隠れていることも忘れて、大きな声でクラリスに思いを送る。

「俺が、お前と一緒にいるのが好きだってことをだ！」

「ア、キラ……！」

「俺はお前を嫌いにならないよ……。」

だから、お前も自分を嫌ったりするな！」

もう、いつかのように抱き締めたりしない。

「どれだけ心配かけたって、いいんだ。

……もう、自分を信じていいんだよ」

今度は、言葉だけ。

俺じゃなく、クラリス自身の存在を感じさせるために。

今のクラリスは俺を信じられないんじゃない。

自分自身を、信じられないんだ。

「私、アキラに好きでいられていいかな……？」

アキラを好きでいて……、迷惑じゃないかな……？」

恋愛感情の話ではない。

存在として、言うなら家族として愛してくれるか。

クラリスは、自分がそれに値するかと聞いているのだ。

勿論だ、そう叫びたい。

でも、その前に。

「その前に……、自分を好きになるように。まずはそこから始めなきゃ、そうだろ？」

「っうん！」

自分と、向き合ってみる！」

クラリスはとびっきりの笑顔で、彰に笑いかけた。彰も、とびっきりの笑顔で返す。

そして、スピカは。

「自分を、好きになる……」

彰の言葉を、反芻している。

今まで、自分を好きでいられたらどうか。

「そんなわけ、ない……」

「……全く、クラリスといいお前といい。

自分を卑下しすぎなんだよ、自信を持ってよな」

「……アキラ、さん……」

彰はいつの間にかスピカの前に立っていた。思い悩むスピカに、言葉をかける。

「……ねえ、スピカ。

私と一緒に、少しずつで良いからさ」

クラリスも彰の横からスピカに語りかける。

「自分を愛せる自分に変わろうよ」

「……クラリス様……」

「クラリスでいいよ、仲間だもん」

「仲間……」。

クラリス……さん」

「さん、もいらないよ」

クラリスは、スピカに向き合って笑顔を向ける。そして、手を差し伸べた。

しかし、スピカはそれを取るか迷っている。

「俺を、仲間外れにしないでくれよ」

彰はそんなスピカの手を引き寄せる。そしてそのまま、三人の手を重ねる。

「力を合わせて、お互いを知りながらさ。

少しずつでもいいから、頑張っていこうぜ」

「ありがとう……、ござい、ます……！」

スピカもまた、孤独だったのかもしれない。故郷を盾にとられてのギルドナイトの仕事。

恐らくは、命じられたまま任務をこなす日々。

その荒んだ世界で、誰かを信じられただろうか？
確たる自分を、持っていられただろうか？

彰は清々しい気分だった。

現代日本では、得がたい感情を得たように思う。
殆どの人間が、選択肢に囲まれている贅沢な現状。
その中で、失ってしまったのではないだろうか。
大切な、一つの感情を。

「さあ、行くぞ。」

胸を張って、生きていくために」

「うん！」

「はい」

今、やっと取り戻せた気がする。

人を、信頼するという感情を。

第二十二話 クラリスの献身、つまり確かな成長

「いいですか、私達は今この場所に居ます」

スピカは地図の一点を指で差しながら二人に向かって言う。

「ギルド本部、だな」

彰が確認の念を込めてスピカに目配せする。

スピカははい、と頷くと更に別の箇所を差した。

「そして、今回の計画の目的地はここ」

「……………」

「ただの住宅じゃないの？」

だが、スピカが指差した場所は特別な施設などではなく、一つの住宅だった。

クラリスも、それを疑問に思っって尋ねる。

「そうですね、ただの住宅です。」

しかし、住んでいる人間は一般市民などではない」

「じゃあ、一体誰なんだ？」

「アキラさんの推理を基に、私は此処に住む人物こそが黒幕だと判断しました。」

住んでいるのは、ここら一帯の領主であり、今は亡き第二十代シユレイド王の古き友人……………」

スピカは深く息を吸って、語る。

「その名を、バリス・グレイグル」

聞き覚えの無い名前だ、と彰は思った。

しかし、隣に居るクラリスはそうではないようで、顔が青ざめて体を震わせていた。

「クラリスッ、大丈夫か？」

しかも、立っていられないのか膝をついてしまった。

クラリスのただ事ではない様子に彰は驚いたが、落ち着いてクラリスの肩に手を置いた。

「……二十代目のシュレイドの王は、私の父さん。

バリスおじさんは、よく私と遊んでくれたのに……」

「……なるほどな」

彰は合点がいった。

クラリスの父と友好を深めていた人物が、黒幕だという理由。

要するに、その人もクラリスが王国を滅ぼしたという噂を信じているんだ。

恐らくは親友が死んだことに少なからず動揺して、冷静な判断力を失っている。

まあ、本当にクラリスがやってないという証拠は無いけれど。

「……なら、クラリスに聞くしかないな」

「……………？何をですか？」

スピカが不思議に思っただけで聞いた。

彰は、それに答えずにクラリスの顔を覗き込んで聞く。

「お前が決めるんだ。」

そのグレイグルをどうするのか。

いや、どうしたいのか」

「……………私が……………？」

クラリスは彰を見上げ、困惑した目をしている。

「お前がケリをつけるんだ、この一件に」

「……………無理よ、そんなの。」

今の私に、そんな重要なこと決められない」

「……………何が重要なもんかよ」

「……………え？」

彰はクラリスの目を見据えて、はっきりと言いつつ放った。

「俺はただ、自分のことは自分で決めろって言うだけだぜ。」

クラリス、お前の手に世界の命運がかかってるわけじゃないんだ」

「それは、そうだけど……………」

「ただ、グレイグルをどうしたいのか。
お前しか決めるやつはいないってただ、世界中でな」

「私しか、いない……」

彰は頷く。

クラリスは暫く膝をついたまま考えていた。

汗の筋が、頬を伝って顎の先に雫ができる。

だけれどそれを気にした様子も無く、目を閉じて苦しそうに。

やがて、クラリスが目を開けた。

「決めたわ」

彰の方を見て決断したことを知らせる。

「……教えてくれ」

彰はクラリスに問う。

その問いに、クラリスはしっかりと目を合わせ答えた。

「おじさんに会って……、話をしたい！」

「……話だけでいいのか？」

お前を陥れた張本人だぞ」

「私の知ってるバリスおじさんは、そんな人じゃない！

きつと、私自身が話をすれば分かってくれる……。」

いいえ、それしかないんだわ、絶対に！」

「本当に、それでいいんだな？」

クラリスはもう一度、しっかりと彰と目を合わせる。

「！」

「……わかった、それでいこう」

彰はクラリスの瞳を見て、決定した。

今見た光は、これまでのクラリスには無い光。

「なんだよ、知らない間に成長しやがって……」

「アキラ、何か言った？」

「……いや、相変わらずクラリスは馬鹿だなって話だ」

「な、なによ！」

私だって、頑張ってるんだから！」

もう、アキラったら、と頬を膨らませて振り返るクラリス。
そんなこと、とっくに知ってるよ……。

「……こんな時にイチャイチャしないでください、二人とも」

「イ、イチャイチャなんてしてないわよ！」

「つつか、したくもないな」

「そ、そこまで言わなくてもいいでしょ！」

「悪い、つい本音が……」

「久しぶりの再開なんだから少しは優しくしてよー!？」

「よしスピカ。」

「ここに行くにはどうしたらいい?」

「む、無視された……」

「……アキラさん。」

「少し可哀相ですよ」

「はいはい、これが終わったらいくらでも相手してやるから」

「……なんかこれ、前にもあったような……」

「で、最短のルート……」。

「じゃなかった、道順は?」

「一番早いのは、この大通りを抜ける方法です。」

「しかし、それは危険が高すぎる。」

「一番見つかりにくいのは、この地下道です」

スピカは地図をバリス邸に向かってなぞる。

しかし、そこには何も載っていない。

「もしかして、極秘の道なのか?」

「はい」

一般には表にされていない秘密通路。

恐らくは、一部の権力を持つものにだけ教えられているのだろう。

「ギルドナイトには、この道の存在が教えられるんです」

「なるほど、要人を守るためにか……」

「そのとおりです、アキラさん」

スピカは地図を持って、少し歩いていく。
大通りとは、逆方向である。

彰とクラリスは黙ってそれについていく。

「ここです。」

この家屋の中に、入り口があります」

「一見普通の一般住宅だけど……」

クラリスがいきなり会話に入ってくる。

「誰かに入られては困りますからね。」

この細い路地の民家に入る泥棒もいないでしょう」

「確かに……」

スピカは彰の方を見て尋ねる。

「どうします？」

今から行きますか？」

彰は顎に手を当てて少し考え込む。
早く決めなければ、ギルド員に見つかってしまふ。
スピカは彰に素早い決断を迫った。

「……いや、少しの期間待とう」

「でも、ギルドの人に見つかったら」

一刻を争うこの時に、何を悠長なことを……。
クラリスとスピカは揃って齒痒そうな顔をした。
しかし彰は不敵な笑みを浮かべるのみであった。

「大丈夫だ。」

俺に……、とてもいい案がある」

「いい案？」

欠片も分からない彰の策に、やはり二人は不思議な顔をするしかなかった。

第二十三話 見えない掛け金、つまり信頼の証を

「ねえ、アキラ。」

「いい案って、一体何なの？」

クラリスが困惑した顔で聞いてくる。

「ギルドの人間は、クラリスさんが逃げ出したことにもう気付いています。」

「あまり長いこと隠れてもいられませんよ、アキラさん」

スピカも、彰の意図が分からずにいる。

恐らくギルド員は既にスピカの裏切りにも気付いているだろう。

「うかうかしていると、虱潰しに搜索されて一巻の終わり、という展開もあり得る。」

それを懸念して、二人は焦っている。

しかし、彰はそれを気にも留めずに逆に質問をする。

「……スピカ、あの地下通路はグレイグルの家ともつながってるんだよね？」

「ええ、それは勿論……。」

「だって、この街一番の権力者ですから」

「なら、問題ない……、はずだ」

「アキラ！」

「大丈夫だつて！」

クラリスは彰の頼りない発言に噛み付くが、彰は声を上げて制する。

「考えても見るよ、ギルドとバリス・グレイグルが繋がっているなら、絶対に街には出歩かないはずだ。

そうなれば、この地下通路を使うのも必然じゃないか？

そして、家にいるよりも護衛を少なくすることだって考えられる」

「……確かに、そうかも」

クラリスは彰の説明に頷いて理解を示す。

しかし、スピカは反論する。

「待つてください！

確かにそれは十分にあり得る可能性でしょう。

しかし、私の裏切りが発覚しているのならば、護衛の件はそれなりに対策を施していると見るべきです！」

「そうか、その可能性もあるのか……」

彰は自分が提示した策に自信があっただけに、落胆を隠そうともしない。

スピカも少なからず落ち込んでいる様子である。

「はい……」

バリスへの道筋が途絶えてしまい、二人は沈黙してしまった。

そもそも、二人はバリスと折り合いを付ける気は無かった。

いや、犯人とも言うべき人間を見逃すつもりはさらさら無かったが、

それが街で一番（腕っ節ではなく権力が）強い人間ともなれば話は別だ。

あらゆる可能性を模索し、その上でクラリスの安全を確保できる方法を取りたい。

そう考えるしかない。

何故なら、他の誰でも無いクラリスが、今一番傷ついている筈だから。

クラリスをこれ以上危険にさらすことは、二人とも避けたかった。

それに、スピカとの約束を果たさなければいけない。

あるギルドの幹部にスピカの故郷の安全を約束させること。

パリスに会えたなら、それも容易に果たせるだろうが、それは望むべくも無いといったところだ。

二人は、特に彰は悩んだ。

しかし、その時思わぬ場所から手が挙がる。

クラリスが、何かを閃いたようだ。

「……はい！」

私、思いついた！」

「……お前が、何を思いついたって？」

「ちょっと、そんな目で見ないでよ！」

私だって少しは考えるわよ、馬鹿にしないで！」

「ふーん」

「クラリスさん、一体何を思いついたんですか？」

「だから、作戦よ！」

クラリスは彰に懐疑的な目を向けられて怒るが、彰は目を変えない。スピカが待ちかねて質問すると、クラリスは大きな声で言い放つ。

「……最初会った頃の見ると影も無いクラリスは、永遠に黙ってる」

「アキラ、そんなこと思ってたの!？」

「それで、作戦とは」

「あ、うん」

クラリスは彰を見たりスピカを見たりと忙しく首を回している。スピカに再度尋ねられて、ようやくクラリスは口を開いた。

「ええと、名付けて……、私の友達に協力してもらってなんとかバリスおじさんの屋敷に入って力尽くで話し合ってしまったおう作戦よ！」

「よし殴ろう」

「ちょ、ちょっとまっ……、いたっ！」

彰はクラリスが口走った長い作戦名を聞いた途端に頭を殴った。

「まず、どこから突っ込もうか……」。

とりあえず、お前の友達って何の話だよ」

「何って、そのままよ。」

「この街に居る私の友達に助けてもらうってこと」

「初耳なんですけど!?!」

「早く言いましたよ、そういう事は……」

彰はクラリスの発言に驚愕し、スピカも呆れている。だが、当の本人は、平然として言い放った。

「だって、言いたくなかったんだもん」

「はい？」

「それはまた、どうして？」

「だって、その人は」

クラリスはどんな思いでこの作戦を言い出しただろう。

目と鼻の先にいるであろうバリスとの邂逅に、一番苦しんでいるのはクラリスだ。

幼少の頃から相識にある二人の再開がこのように残酷なものになることを誰が知っていただろう。

或いは、他ならぬバリス自身には、この一件に限っては先見の明が宿っていたかもしれない。

そして今、クラリスは何を考えてこの名前を口にしただろうか。

スピカは存在を知っていたのかもしれないが、彰にとってはこの時ばかりは居るかも判らない神の酷薄さを呪った。

何故、クラリスにばかり、情け容赦が無いのだろうか、と。

クラリスは、言ってしまった。

「　　バリスおじさんの、娘だから」

「な　　！」

「ラヴィンスを、傷つけることになるけれど、きっと大丈夫。
ラヴィンスなら分かってくれる筈よ」

悲しい光が瞳に浮かぶ。

それは舗装された地面が反射する太陽の光だろうか。
親友との思い出の日々だろうか。

「私はバリスおじさんに言わなきゃいけないんだ。
それは、間違っています、って」

神か悪魔との大博打を前にして、クラリスが差し出したのは確率。
ラヴィンス・グレイグル、その人の優しさに全てを賭けた。

作戦は、三時間後。

雲が茜色を翳らせるその頃に、開始された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6150w/>

異界の狩人

2012年1月5日23時53分発行